



Title	＜翻訳＞アルムファッダリーヤート試訳（XVIII-XXVI）
Author(s)	池田， 修
Citation	アラブ・イスラム研究. 2012, 10, p. 1-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105941
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『アラブ・イスラム研究』第10号、2012年、1-47頁
落丁・乱丁のお詫び

池田修訳「アルムファッダリーヤート (XVIII-XXVI)」に下記の落丁と乱丁がありました。

32 頁 → 18 頁の再掲

33 頁 → 19 頁の再掲

本 PDF の末尾に「本来の 32 頁と 33 頁」を収録していますので、差し替え願います。

2021 年 9 月 関西アラブ研究会

Errata in *Journal of Arabic and Islamic Studies*, vol. 10 (2012), pp. 1-47

To our regret, we found the following printing errors. We kindly ask readers to replace them with the correct pages, which we append at the end of this PDF.

p. 32, where p. 18 was printed for the second time

p. 33, where p. 19 was printed for the second time

アルムファッダリーヤート試訳

— (XVIII) アブド・アッラー・ブヌ・サリマ・アルガーミディー —

عَبْدُ اللَّهِ بْنُ سَلِيمَةَ الْغَامِدِيِّ

池田 修*

まえがき

彼の父の名については、Salīma または Salīm だとするなどの所伝がある。al-Ghāmīdī というのは彼の祖先の ‘Amr b. Ka‘b のあだ名、ガーミド Ghāmīd (刀を鞘にさす者) に由来する。この祖先に対して、ある男が“刀を鞘に納める者は安全だ”と言い、常に刀を納めていたので、ガーミドというあだ名がつけられたと言われている。この詩人の年齢や生涯についてはほとんど何も分かっていない。彼はヤマン系の雄族でアラビア半島に広がったアズド ‘Azd の分派シャヌーア Shanū‘a 族に属していた。ガーミド一家は Sarāt の北部を居住地としていた。その北にはアズド系のダウス Daws 族が、南側には同アンズ ‘Anz 族が住んでいた。また、北には北アラブ系のファフム Fahm 族やアドワーン ‘Adwān 族等が居住していた。アズドは、今日 ‘Asīr と呼ばれる地方を本拠としていた。この詩と次の No. XIX の同じ詩人による詩は、もともと長詩であったものの断片である。何時ごろのものか不明であるが、多分、ジャーヒリーヤ時代の作品であろう。

この詩では、彼の愛する女性が類まれな美女である点に触れ、年老いてはいるが勇敢さを保つ詩人自身を誇り、ラクダと馬と狩りを取り上げ、優れた騎士であることを謳歌している。ṭawīl 調、19行。

(XVIII) テキスト

قَالَ عَبْدُ اللَّهِ بْنُ سَلِيمَةَ الْغَامِدِيِّ

- | | |
|--------------------------------------|--|
| فَفَرَّغْنَا وَمَالَ بِهَا قَضِيبٌ | ١- أَلَا صَرَمْتُ حَبَائِلَنَا جُنُوبُ |
| غَدَاةَ بِرَاقٍ تَجْرُ وَلَا أَحُوبُ | ٢- وَلَمْ أَرِ مِثْلَ بِنْتِ أَبِي وَفَاءٍ |
| عَلَيَّ إِذَا مُدْرَعَةٌ خَضِيبُ | ٣- وَلَمْ أَرِ مِثْلَهَا بِأَنْيْفٍ فَرْعٍ |
| يَشُبُّ قَسَامَهَا كَرَمٌ وَطِيبُ | ٤- وَلَمْ أَرِ مِثْلَهَا بِوَحَافٍ لُبْنِ |
| هُنُونَ أَجْنٌ مَنْشَأُ ذَا قَرِيبُ | ٥- عَلَى مَا أَنَّهَا هَزَيْتُ وَقَالَتْ |

* 大阪外国語大学 名誉教授

- 6- فَإِنْ أَكْبَرَ فَإِنِّي فِي لِدَاتِي
 7- وَإِنْ أَكْبَرَ فَلَا بِأَطِيرُ أَصْرٍ
 8- وَسَامِي النَّاطِرَيْنِ غَذِيٍّ كَثْرٍ
 9- نَقَمْتُ الْوَتَرَ مِنْهُ فَلَمْ أُعْتَمِّ
 10- وَلَوْلَا مَا أُجْرَعُهُ عَيْنَانَا
 11- فَإِنْ تَشِبَّ الْقُرُونُ فَذَاكَ عَصْرُ
 12- كَأَنَّ بَنَاتٍ مَخْرَجَاتٍ رَائِحَاتٍ
 13- وَنَاجِيَةٍ بَعَثْتُ عَلَى سَبِيلِ
 14- إِذَا وَنَتِ الْمَطْيُيْ ذَكَتْ وَخُودُ
 15- وَأَجْرَدَ كَالْهَرَاوَةِ صَاعِدِيٍّ
 16- دَرَأْتُ عَلَى أَوَابِدِ نَاجِيَاتٍ
 17- فَغَادَرْتُ الْقَنَاءَ كَأَنَّ فِيهَا
 18- وَذِي رَحِمٍ حَبُونُ وَذِي دَلَالٍ
 19- أَلَا لَمْ يَزُتْ فِي اللَّزْبَاتِ ذَرْعِي
- وَعَصْرُ جُنُوبٍ مُقْتَبِلٌ قَشِيبُ
 يُفَارِقُ عَاتِقِي ذَكَرٌ خَشِيبُ
 وَنَابِتٌ ثَرْوَةٌ كَثُرُوا فَهَيُّوا
 إِذَا مُسِحَتْ بِمَغِيظَةٍ جُنُوبُ
 لَلَّاحٍ بِوَجْهِهِ مِنِّي نُدُوبُ
 وَعَاقِبَةُ الْأَصَاغِرِ أَنْ يَشِيبُوا
 جُنُوبُ وَغُصْنُهَا الْغَضُّ الرَّطِيبُ
 كَأَنَّ بَيَاضَ مَنْجَرِهِ سُبُوبُ
 مُوَاشِكَةٌ عَلَى الْبَلَوَى نَعُوبُ
 يَزِينُ فَقَارَهُ مَتْنٌ لَجِيبُ
 يَحْفُ رِيَاضَهَا قَضْفٌ وَلُوبُ
 غَيْرًا بَلَّهَ مِنْهَا الْكُثُوبُ
 مِنَ الْأَصْحَابِ إِذْ خَدَعَ الصُّحُوبُ
 سَوَافُ الْمَالِ وَالْعَامُ الْجَدِيبُ

(XVIII) 訳

- 1- ああ悲しいかな、ジャヌーブはわれらの絆を断ち切った。われらは高地に移り、彼女は（ネジド）のカディーブの谷間に下って行った。
- 2- 私はサジュルの石ころ混じりの地で、早朝、アブー・ワファールウの娘ジャヌーブほどの美人を見たことがない。このように言ったとて何の咎が私にあるか。
- 3- また、私はウナイフ・ファルウの地で彼女ほどの美人を見たことがない。私はこのことを血染めのラクダ¹⁾にかけて断言する。
- 4- 私はルブン山の黒石の多い丘で、彼女に優る美人を見たことがない。高貴さと貞淑さが彼女の美しさを一層引き立てていた。
- 5- ところが彼女はあざ笑って「みなさん、このお方は気でも狂われたのですか。お生まれになられたのは最近のことですのに²⁾。」と言った。
- 6- たとえ、私は年老いたとしても、（私だけが老いるのではなく）私の周りには同じ年代の者が沢山いるではないか。他方、ジャヌーブの人生はこれから新たに始

1) 「血染めのラクダ」：違約したらラクダを切り分けて与える、の意。

2) 年寄りをからかって、生まれたのは最近、と言ったもの。

まるのである。

- 7- 年老いたとはいえ、私は固く誓って言うが、磨かれた剣を肩から離すことは断じてない³⁾。
- 8- 高慢な目つきをして、裕福に育った、多数を誇る部族出の者達の多いことよ。そのような部族は多数故に恐れられている。
- 9- (そのような部族の男に出会うと) 私は直ちに復讐する。横腹が怒りにふれるときには、遅滞なく復讐する⁴⁾。
- 10- 私が明瞭にぶつけた怒りに、彼がよく耐えなかったなら、きっと、心が受けた傷跡が彼の顔に現れたであろう。
- 11- 私の髪房が灰色になったとしても、それは歳月の経過によるもので、何の不思議があろう。若い者も行く末には、皆、白髪になるのである⁵⁾。
- 12- 初夏を前にして、夕方、流れ行く軽やかで美しい巻雲はあたかもジャヌーブのようだ。即ち、それは彼女のみずみずしい柔らかな肢体そのものだ⁶⁾。
- 13- 私は多くの駿足ラクダに道を急がせた。道路の中央部は白く、亜麻布の切れ端を敷きつめたようであった。
- 14- 他のラクダが疲れて歩みが緩むとき、私の駿足ラクダは激しく燃える火のように活動し、試練に耐えた引き締まった体で速度を上げる。
- 15- 短毛で棒のようにすらりとした駿馬を、私は幾頭乗り回したことだろう。いずれも、サーイド⁷⁾の血を引く馬で、背中は引き締まった筋肉で飾られている。
- 16- 私は、足の早い野生のロバを、この馬に乗って襲ったが、ロバが餌を食べる草原は小石混じりの盛り土や黒い溶岩層に囲まれていた⁸⁾。
- 17- 野生のロバを倒した後、私は槍を獲物からはずしたが、槍の握りはまるで、アビール⁹⁾を塗ったように、血で濡れていた。
- 18- 私は、なんと多くの親族や幸運に見放された機転のきく友人達に援助の手を差し伸べたことであろうか。
- 19- しかり、家畜の死や不作の年においても、援助する私の手は、苦難にあえぐ人々にたいして、力を落とさなかった。

3) 剣は皮ひもで肩に担いでいた。

4) ここでの復讐は10行目で言葉による風刺であることが明かされる。

5) 恋人ジャヌーブに、今は若くとも時がたてば白髪になる、と仄めかしている。この一行は6行と7行の間に入れるのが適当。

6) この一行も11行と同様に6行と7行の間に入れるのが適当。

7) Šā'id は種馬の名。駿馬は hirāwa (棒) 又は qanā (槍) によく喩えられる。

8) 走るのに困難な土地をものともせず、馬が駆けて狩りをしたことを表している。

9) 'abīr はサフランを他の香料と混ぜ合わせた赤い香料、又は、サフランそのものを表す。

— (XIX) アブド・アッラー・ブヌ・サリマ・アルガーミディー —

عَبْدُ اللَّهِ بْنُ سَلَمَةَ الْغَامِدِيِّ

まえがき

アルガーミディーという詩人については本詩集 No. XVIII で紹介したとおりである。この詩も長詩が切れ切れになった断片詩となっている。特に、4-5行の間と、10-11行の間には多くのものが脱落している。序詩の部分では、脱落のため相手の女性が誰であるか分からなくなっている。詩は彼女の住居跡が消えたこと、馬での狩り、自己の強さと気前よさを詠んでいる。kāmil 調、14行。

(XIX) テキスト

قَالَ عَبْدُ اللَّهِ بْنُ سَلَمَةَ الْغَامِدِيِّ

- | | |
|--|--|
| فَبَيَاضُ رَيْطَةٍ غَيْرَ ذَاتِ أُنَيْسٍ | ١- لِمَنِ الدِّيَارُ بِتَوَلَّجٍ فَيُبُوسٍ |
| كَالْوَشْمِ رُجَّعٍ فِي الْيَدِ الْمُنْكُوسِ | ٢- أُمَسْتُ بِمُسْتَنَّ الرِّيَّاحِ مُفِيلَةٍ |
| فِي صَحْبِهَا الْمُعْفُو ذَيْلُ عُرُوسٍ | ٣- وَكَأَنَّمَا جَرُّ الرُّوَامِسِ ذَيْلُهَا |
| حَرْفٍ كَعُودِ الْقُوسِ غَيْرِ ضُرُوسٍ | ٤- فَتَعَدَّ عَنْهَا إِذْ نَأَتْ بِشِمْلَةٍ |
| كَالْجَذَعِ وَسَطِ الْجَنَّةِ الْمَغْرُوسِ | ٥- وَلَقَدْ غَدَوْتُ عَلَى الْقَنِيصِ بِشَيْظَمٍ |
| رَحْبِ اللَّبَانِ شَدِيدِ طَيِّ صَرِيصٍ | ٦- مُتَقَارِبِ الثَّقَفَاتِ ضَيْقِ زُورَةٍ |
| وَتَرَى حَبَابَ الْمَاءِ غَيْرَ يَبِيصٍ | ٧- تُعَلَّى عَلَيْهِ مَسَائِحُ مِنْ فِضَّةٍ |
| كَصَفَائِحٍ مِنْ حُبْلَةٍ وَسَلُوسٍ | ٨- فَتَرَاهُ كَالْمَشْعُوفِ أَعْلَى مَرْقَبٍ |
| بِنَوَاضِحٍ يَفْطُرْنَ غَيْرَ وَرِيصٍ | ٩- فِي مُرَبَّلَاتٍ رَوَّحَتْ صَفَرِيَّةٍ |
| وَسَوَاءَ جَبْهَتِهِ مَدَاكُ عُرُوسٍ | ١٠- فَتَزَعُّهُ وَكَأَنَّ فَجَّ لَبَانِهِ |
| بِصَحَابٍ مُطَّلِعِ الْأَذَى نَقَرِيصٍ | ١١- وَلَقَدْ أَصَاحِبُ صَاحِبًا ذَا مَأْقَةٍ |
| صَعْبِ الْبُدَاهَةِ ذِي شَذَا وَشَرِيصٍ | ١٢- وَلَقَدْ أَزَاجِمُ ذَا الشَّدَاقِ بِمِرْحَمٍ |
| وَلَقَدْ أَجَازِي أَهْلَ كُلِّ حَوِيصٍ | ١٣- وَلَقَدْ أَلَيْنُ لِكُلِّ بَاغِي نِعْمَةٍ |
| بِعَنِيَّةٍ غَلَبَتْ عَلَى النَّطِيصِ | ١٤- وَلَقَدْ أَدَاوِي دَاءَ كُلِّ مُعَبِّدٍ |

(XIX) 訳

- 1- タウラア¹⁰⁾とヤブースの廃墟はそも誰の住まいであったか。バヤード・ライタには、いまや人影とてない。
- 2- 住居の跡は烈風で消され、昔の面影をほとんど留めず、手に彫り改められて元の姿に戻された刺青のようである。
- 3- 住居跡を埋没させ、消し去った風が引きずった裾は、花嫁の衣裳が床の塵を一掃したかのように跡地を掃き清めていた。
- 4- かつて、ここに住んでいた彼女はすでに遠くに去ってしまった。それゆえ、お前は弓の弦のように細く引きしまった、噛み癖のない、軽快な駿足ラクダに乗って、ここから立ち去るがよい。
- 5- 私は早朝、果樹園の真ん中に植えられているナツメヤシの樹の幹のように長身の痩せた馬を駆って狩りに出かけた。
- 6- この馬は膝と踝が互いに接近しており、胸の上部がせまく、その下部は広く、脊髄は強固に組み合わされている¹¹⁾。
- 7- 馬の毛の表面は銀片で覆われており、初汗の露滴は未だ乾いていない¹²⁾。
- 8- あなたは馬を見て、(獵師を) 恐れて、見張り場の頂点に立っている野生のロバかと思うであろう。(首に提げているのは) アカシアの実と真珠を繋いだ首飾りのようだ¹³⁾。
- 9- 秋に葉を茂らす灌木の林の中で、(他の多くの樹は秋には葉が) インドサフランのように黄色になるが、アカシアは緑の芽を吹き出す¹⁴⁾。
- 10- 私は馬を手綱で引きとめたが馬の広い胸の中央と額の真ん中は、花嫁が香料を砕く石板のように(獲物の血が塗られていた)¹⁵⁾。
- 11- 私は短気な友人と付き合うこともあるが、そのような人物による危害に対して寛容で、経験豊かな扱いをして接する。
- 12- もっとも、私には、危害を加える者に対しては、即座に邪陰な加害者として激しく挑む力がある。
- 13- 私は誰であつても恩恵を求める者には、すべて柔和に接する。だが、私に敵意を表す者すべてには、復讐するであろう。

10) Tawla⁶, Yabūs, Bayād Rayṭa はいずれもアズド系のシャヌーア *Shanūa*⁷ 族が拠った地名。

11) *thafināt* : 膝と踝の接続部を表すラクダに用いる単語であるが、馬に借用している。6行のような馬が駿馬であることは No.VIII, 29行でも取り上げられている。

12) 馬の毛が短く清らかで、立派な馬であることを誇っている。

13) 下の句の意味は、馬の汗がアカシアの実と真珠を数珠繋ぎにしたように光っていると言っているのかもしれない。いずれにせよ、前の句との間に欠落部分があるらしく、関連が不明。

14) この文は8行との関連から、アカシアを主語ととらえた。*ṣafariya* は「初秋の植物」と解説にあるが、イスラム以前のサファル月 *ṣafar* のことかもしれない。元来この月はアルムハッラム月 *al-muḥarram* につづく第2月で12-1月に置かれていた。ヒジュラ以後、他の月と同様に6カ月動かされ、そのうえ、閏年の計算を廃止し、月暦としたため季節を表さなくなった。

15) アラブは獲物の血を馬の胸や額に塗るのを習慣としていた。香料砕きの石板はサフランの色に染まっているので、このような表現になったものであろう。イムルウ・ル・カイスの *al-muʿallaqa* 62, 63行が参考になる。

- 14- 私は、疥癬にかかり、毛が抜けてしまったすべてのラクダの病を、優れた医師にもまさるラクダの尿で作った塗り薬で治すことが出来る¹⁶⁾。

16) mu‘abbad : 疥癬にかかり、毛が残らず抜けてしまったラクダのことで、このようなラクダが歩んだ道には草が枯れて地面がむき出しになると言われていた。‘anīya : ラクダの尿に家畜の皮とある種の樹脂の灰を混ぜて煮詰め、ラクダに塗って疥癬を治す薬。なお、この一行は、「私は、どのような馬鹿でも、憎悪する者でも、力と知恵で治す達人だ」が本意とされている。

— (XX) アッシャーンファラー・アルアズディー —

الشَّنْفَرَى الْأَزْدِيُّ

まえがき

本詩集の No.I で紹介したように、アッシャーンファラーはタアッバタ・シャッラン及びアムル・ブヌ・バッラクと共に「早駆け3人衆」で、バジーラ族を襲撃した時、走力を利して無事逃げ延びた、と伝えられているとおり、ジャーヒリーヤ時代に部族社会のはぐれ者を代表する詩人であった。

『歌の書』(21, 134) の彼の伝説によると、少年の頃、サラマーン族 Banū Salamān に、父は殺され彼は捕われ、この部族のもとで育った。だが、成長してこの事実を知ると、母と共に、タアッバタ・シャッランの属するファフム Fahm 族に身を寄せ、父の殺害の報復を誓い、サラマーン族の男を100人殺すことを生涯の目的とした。そして、99人まで殺した後、捕えられ、首をはねられた。死体は野獣の餌にされた。やがて、白骨となった彼の頭蓋骨を、サラマーン族のある男が蹴ったところ、骨片が足にささり、脱疽にかかって死んでしまい、100人殺害の誓いが成就した。この逸話は単なる言い伝えに過ぎず、真偽のほどは分からない。また、同書5, 171のタアッバタ・シャッランの記事では、彼がアッシャーンファラーの母方の叔父とあるが、これはナンセンスな言い伝えである。

アッシャーンファラーがヤマン系アズド族の支族アルヒジュール al-Hijr の出身であることは確かなようである。また、『歌の書』では、彼の両親は由緒ある血筋の者であるが、これもありえないことと思われる。彼は「アラブのカラス ʿaghriba al-ʿarab」の一人に数えられており、エチオピア系の母の子で肌が黒く、唇が厚かっただろう。アッシャーンファラーというのは彼のあだ名で、唇が厚い男という意味があるといわれている。

今ひとつ、彼が復讐に努めたアズド系のサラマーン族の男で、ʿAsīd (又は ʿUsayd) al-Ghāmīdī なる者が、詩人を待ち伏せして捕らえた、とされているが、本詩集 No. XVIII 及び XIX にアルガーミディーの二つの断片詩を配置しているのは、アッシャーンファラーの出自がアズド系であることと関連してのことかもしれない。いずれにせよ、この詩人の生涯については、彼が詩の中で語っている情報以上のものはないようである。

アッシャーンファラーは自身のことを、「破滅に引き出された者 mubsal bi-l-jarāʾir」(ハマーサ詩集242-3の彼の3篇の詩)とか、「罪のため追放された者 ʿarīd jināyat-in」(Lāmiya al-ʿArab, 45行)などと詠んでおり、以下に訳した詩では、誰一人見とつてくれない孤独死を予想している。

これらから考えられるのは、彼が部族内で、暴力行為を働き、許されない境遇におかれたことである。その結果、部族との絆を失い、いわゆる、「はぐれ者 khālīf」となって、ファフム族に身を寄せたのであろう。そこで、同部族のタアッバタ・シ

ヤッランの友人となった。彼が殺されたときに、タアッバタ・シャッランが哀悼詩を詠んだ、と注釈にあるから、最後まで、ファム族とはよい関係を保っていたと考えられる。

彼を有名にしたのは長詩 *Lāmiya al-ʿarab* であるが、これは *Khalaf al-Aḥmar* による模造詩とも言われていて、真偽のほどは分かっていないが、今日、多くの評者はベドウィン詩人による真正な作であると見なしている。彼は並外れた脚力を持ち、ラクダに頼らず、野獣に近い生活をしながら砂漠をうろついていた。それは、ベドウィンの精神をよく描いてはいるが、部族的価値を否定しており、ジャーヒリーヤ詩の特異な作品ではあるが、その代表的な作品ではない。古来、*Lāmiya al-ʿArab* は、*Thaʿlab*、*al-Zamakhsharī*、*al-Tibrīzī*、*al-Mubarrad* らによって注釈されてきたが、アッザマフシャリーによる注釈書 (Cairo, 1989) が優れていると思われる。アッシャヤンファラーの今ひとつの長詩は以下に訳した本詩集 No. XX に配置されている。

1-14行：女性の貞節さを見事に描いている。15-18行：詩人の習性と略奪行を自慢。19-26行：すさまじい略奪戦と盟友タアッバタ・シャッランについての記述。27-30行：特定の復讐戦。31-32行：部族に追放され、孤独な将来の記述。33-36行：危害へのすばやい対応。21行と33行をカイロ版により追加した。ṭawīl 調、36行。

(XX) テキスト

قَالَ الشَّنْفَرَى الْأَزْدِيُّ

- | | |
|--|---|
| وَمَا وَدَّعْتُ جِيرَانَهَا إِذْ تَوَلَّيْتُ | ١- أَلَا أُمُّ عَمْرٍو أَجْمَعَتْ فَاسْتَقَلَّتْ |
| وَكَاثَتْ بِأَعْنَاقِ الْمَطِيِّ أَطْلَّتْ | ٢- وَقَدْ سَبَقْتَنَا أُمُّ عَمْرٍو بِأَمْرِهَا |
| فَقَضَّتْ أُمُورًا فَاسْتَقَلَّتْ فَوَلَّيْتُ | ٣- بَعِينِي مَا أُمَسْتُ فَبَاتَتْ فَأَصْبَحْتُ |
| طَمِعْتُ فَهَبَّهَا نِعْمَةُ الْعَيْشِ زَلَّتْ | ٤- فَوَا كِيدًا عَلَى أُمَيْمَةَ بَعْدَ مَا |
| إِذَا ذُكِرْتُ وَلَا بِذَاتِ تَقَلُّتْ | ٥- فَيَا جَارَتِي وَأَنْتِ غَيْرُ مُلِيمَةٍ |
| إِذَا مَا مَشَتْ وَلَا بِذَاتِ تَلَفَّتْ | ٦- لَقَدْ أَعْجَبْتَنِي لَا سَقُوطًا قِنَاعُهَا |
| لِجَارَتِهَا إِذَا الْهَدِيَّةُ قَلَّتْ | ٧- تَبَيْتُ بُعَيْدَ النَّوْمِ تُهْدِي غُبُوقَهَا |
| إِذَا مَا يُبُوتُ بِالْمَذْمَةِ حُلَّتْ | ٨- تَحُلُّ بِمَنْجَاةٍ مِنَ اللَّوْمِ يَنْتَهَا |
| عَلَى أَمَّهَا وَإِنْ تُكَلِّمُكَ تَبَلَّتْ | ٩- كَأَنَّ لَهَا فِي الْأَرْضِ نِسِيًا تَقْصُهُ |
| إِذَا ذُكِرَ النَّسْوَانُ عَفَّتْ وَجَلَّتْ | ١٠- أُمَيْمَةُ لَا يُخْزِي نَفَاها حَلِيلُهَا |
| مَاتَ السَّعِيدُ لَمْ يَسْلُ أَبْنُ ظَلَّتْ | ١١- إِذَا هُوَ أَمْسَى آبَ قُرَّةٍ عَيْنِهِ |

- ١٢- فَدَقْتُ وَجَلَّتْ وَاسْبَكَرْتُ وَأُكْمِلْتُ
 ١٣- فَبِتْنَا كَأَنَّ الْبَيْتَ حُجْرَ فَوْقَنَا
 ١٤- بِرِيحَانَةٍ مِنْ بَطْنِ حَلِيَّةٍ نَوَّرَتْ
 ١٥- وَبَاضِعَةٍ حُمُرِ الْقَيْسِيِّ بَعَثَتْهَا
 ١٦- خَرَجْنَا مِنَ الْوَادِي الَّذِي بَيْنَ مِشْعَلٍ
 ١٧- أُمَشِّي عَلَى الْأَرْضِ الَّتِي لَنْ تَضُرَّنِي
 ١٨- أُمَشِّي عَلَى أَيْنِ الْعَرَاةِ وَبُعْدِهَا
 ١٩- وَأُمِّ عِيَالٍ قَدْ شَهِدْتُ تَقَوُّتُهُمْ
 ٢٠- تَخَافُ عَلَيْنَا الْعَيْلَ إِنْ هِيَ أَكْثَرَتْ
 ٢١- وَمَا إِنْ بِهَا ضِنٌّ بِمَا فِي وَعَائِهَا
 ٢٢- مُصْعَلِكَةً لَا يَقْضُرُ السُّتْرُ دُونَهَا
 ٢٣- لَهَا وَفَضَةٌ فِيهَا ثَلَاثُونَ سَيْحَفًا
 ٢٤- وَتَأْتِي الْعَدِيَّ بَارِزًا نِصْفُ سَاقِهَا
 ٢٥- إِذَا فَزَعُوا طَارَتْ بِأَبْيَضٍ صَارِمٍ
 ٢٦- حُسَامٍ كَلَوْنِ الْمِلْحِ صَافٍ حَدِيدُهُ
 ٢٧- تَرَاهَا كَأَذْنَابِ الْحَسِيلِ صَوَادِرًا
 ٢٨- قَتَلْنَا قَتِيلًا مُهْدِيًا بِمُلْبِدٍ
 ٢٩- جَزَيْنَا سَلَامَانَ بْنِ مُفْرِجٍ قَرَضَهَا
 ٣٠- وَهْنَى بِي قَوْمٍ وَمَا إِنْ هَنَأَتْهُمْ
 ٣١- شَفَيْنَا بِعَبْدِ اللَّهِ بَعْضَ غَلِيلِنَا
 ٣٢- إِذَا مَا أَتَيْتَنِي مَيْتِي لَمْ أَبَالِهَا
 ٣٣- وَلَوْ لَمْ أَرُمْ فِي أَهْلِ بَيْتِي قَاعِدًا
 ٣٤- إِلَّا لَا تُعَذِّبُنِي إِنْ تَشَكَّيْتُ خُلَّتِي
 ٣٥- وَإِنِّي لَحُلُّوْ إِنْ أُرِيدْتُ حَلَاوَتِي
 ٣٦- أَبِي لِمَا أَبِي سَرِيعٍ مَبَاءَتِي
- فَلَوْ جُنَّ إِنْسَانٌ مِنَ الْحُسْنِ جُنَّتْ
 بِرِيحَانَةٍ رِيحَتْ عِشَاءً وَطُلَّتْ
 لَهَا أَرْجٌ مَا حَوْلَهَا غَيْرُ مُسْنِتٍ
 وَمَنْ يَغْزُ يَغْنَمُ مَرَّةً وَيُشَمَّتْ
 وَبَيْنَ الْجَبَا هِيَهَاتَ أَنْشَأْتُ سُرْبِي
 لِأَنْكِي قَوْمًا أَوْ أَصَادِفَ حُمَّتِي
 يُقَرِّبُنِي مِنْهَا رَوَاحِي وَغُدَوَتِي
 إِذَا أَطْعَمْتُهُمْ أَوْتَحْتُ وَأَقَلَّتْ
 وَنَحْنُ جِيَاعٌ أَيَّ آلٍ تَأَلَّتْ
 وَلَكِنَّهَا مِنْ خِيَفَةِ الْجُوعِ أَبَقَتْ
 وَلَا تُرْتَجَى لِلْبَيْتِ إِنْ لَمْ تُبَيَّتْ
 إِذَا آتَسْتُ أُولَى الْعَدِيِّ أَفْشَعَرْتُ
 تَجُولُ كَعَيْرِ الْعَانَةِ الْمُتَلَقَّتْ
 وَرَامَتْ بِمَا فِي جَفْرِهَا ثُمَّ سَلَّتْ
 جُرَارٍ كَأَقْطَاعِ الْغَدِيرِ الْمُنْعَتِ
 وَقَدْ نَهَلْتُ مِنَ الدَّمَاءِ وَعَلَّتْ
 جِمَارَ مَنَى وَسَطَ الْحَجِيجِ الْمُصَوَّتِ
 بِمَا قَدَمْتُ أَيْدِيَهُمْ وَأَزَلَّتْ
 وَأَصْبَحْتُ فِي قَوْمٍ وَلَيْسُوا بِمُنِيَّتِي
 وَعَوَفٍ لَدَى الْمَعْدَى أَوَانَ اسْتَهَلَّتْ
 وَلَمْ تُذِرْ خَالَاتِي الدَّمُوعَ وَعَمَّتِي
 إِذَنْ جَاءَنِي بَيْنَ الْعُمُودَيْنِ حُمَّتِي
 شَفَانِي بِأَعْلَى ذِي الْبَرِّيْقَيْنِ عَدَوَتِي
 وَمُرٌّ إِذَا نَفْسُ الْعَرُوفِ اسْتَمَرَّتْ
 إِلَى كُلِّ نَفْسٍ تَنْتَحِي فِي مَسَرَّتِي

(XX) 訳

- 1- ああ、ウムム・アムルは意を決して、旅立ってしまった。彼女は立ち去るにあたり、隣人らに別れも告げなかった。
- 2- 彼女は私たちに事前の語らいもせず、旅立ちを独りで決めた。彼女が乗ったラクダの首が覆って私たちに日陰を作ったのは突然のことであった。
- 3- 彼女は夕方も、夜も、朝も、常に私の目の中にあった。だが、彼女は諸事を片付けて、旅立ち、去ってしまった。
- 4- ああ、悲しいかな、私の心（肝臓）はウマイマ¹⁷⁾を熱望した時以来、彼女に憧れている。しかり、彼女は私の人生の喜悦であったのに、去って行った。
- 5- おお、愛しいわが隣人よ、そなたのことが人々の話題にされる時には、そなたは、非難される女でもなく、また、憎たらしいと言われるような女でもなかった¹⁸⁾。
- 6- 彼女はその魅力で私を虜にした。歩む時にはヴェールがずれないようにゆったり歩み、（みだらな女のように）あたりをきょろきょろ見回しはしない。
- 7- 彼女は夜、少し眠った後、起きて、（不毛時や冬季に）贈り物が不足している隣の婦人らに夕食を贈る¹⁹⁾。
- 8- 彼女は人々の誹りを凌駕するところにテントを構えている。他方、多くのテントは悪評的になる所に張られている²⁰⁾。
- 9- 彼女は歩む時、はにかみ、無くした何かを地面で探しているかのように、うつむいている。また、君に話しかける時には、声がか細く、途切れ途切れになる²¹⁾。
- 10- ウマイマの評判は彼女の夫を辱めるようなことはない。女たちが話題にされるときには、彼女は貞節で清純だと評される。
- 11- 夫は夕方になると、幸福な者が帰宅するように、嬉々として帰ってくるが（妻であるウマイマに今日は）何処でいかようにして過ごしたか、と尋ねたりはしない²²⁾。
- 12- 彼女は、一見したところ、すらりとしているが、豊満で、背が高く、完璧な美女である。人が美しさゆえにジンに取り憑かれるものなら、彼女はきっと、ジンに取りつかれるであろう。
- 13- われ等は、たそがれ時に、天上からメボウキの香りが封じ込められ霧となってただようテントのなかで、夜を過ごした。
- 14- それは、ハルヤ溪谷²³⁾のメボウキで、目下、花が咲き乱れ、あたりに芳香を撒

17) 'umayma は 'umm の縮小形で1行目の 'Umm 'Amr のこと。

18) 動詞 taqallati を属格位にもちいているのに注目。

19) これは彼女の気前よさを述べたもの。この行は9行目に配置すべきである。

20) この行は5行目の後に配置すべきもの。

21) この行は6行目の後に配置すべきもの。

22) 何故なら、彼女は住まいから離れることがないからである。アルアスマイーはここまでの数行は女性のはにかみと貞節について詠まれた最高のものと評価している。

23) Halya は Tihāma の溪谷で、上流部はフザイル族、下流部はキナーナ族の居住地。この溪谷には芳香植物がよく育つ。13, 14行はウマイマという女性をメボウキの良い芳香に喩えたものであろう。

- き散らせている。そのあたりは（肥沃で）乾ききった砂地はない。
- 15- 私は赤い弓²⁴⁾を携えた多くの戦士らを引き連れて、略奪に及んだ。襲撃者は時には、戦利品を得るが、時には失望するものだ。
- 16- 我々はミシュアルとアルジャバーの間にある溪谷から出撃した。（戦利品を求めて）仲間たちと遠征した目的地は実に遠かった。
- 17- 私は何人も恐れることなく、大地を歩み続ける。それは、敵を打ち倒すためであるが、思いがけなく、死にみまわれる恐れもある。
- 18- 私は遠隔地への襲撃をするために、疲れを厭わず、（ラクダに乗らず）歩み続ける²⁵⁾。そのうち夕方と夜明けの間に、目的地に近づける。
- 19- 私は主婦²⁶⁾が彼らに給食する様子を見た。彼女が彼らに食べさせる時には、少量に加減して給仕していた。
- 20- 彼女は多量給仕すると、われ等が食べ物不足に悩まされるのを心配しているのである。われ等は空腹であるが、彼女は（われ等を）よく治めている。
- 21- 即ち、彼女は貯えている食糧を出し惜しんでいるのではなく、飢えを恐れて、それを残しているのである。
- 22- 彼女は無法者の仲間で、顔をヴェールで隠したりはしていない。たとえ、夜襲をしなくても。家に留まることを厭い、（すぐに仲間のところにやって来る）。
- 23- 彼女は矢尻が広い30本の矢²⁷⁾が入った矢筒を持っていて、遠くに敵集団が居ると感じると、鳥肌を立てて、戦闘態勢に入る。
- 24- 彼女は向う脛をむき出しにして、敵に挑みかかり、ロバの群れを見張る野生の雄ロバのように（味方を守るために）あたりを走り回る²⁸⁾。
- 25- 敵兵らが恐怖に駆られていると見るや、彼女は鋭利な剣を手にして、急襲する。まず、矢を射、ついで、剣を抜いて戦うのである。
- 26- その剣は塩のように真っ白で、刃は光っていて、詩人らが、池の水面が風で、さざ波が立ち、煌めいているようだ、と詠んでいる通りに輝いている²⁹⁾。
- 27- あなたは、池から出て来て煌めいている剣（の林が）、子牛たち³⁰⁾が揚げている

24) 弓は nab' という樹を材料として作られるが、使っているうちに、日差しや雨にさらされて赤くなる。

25) 彼は脚力、走力に優れラクダを利用しない。

26) 'umm 'iyāl (主婦) とは、タッパタ・シャッランのこと。アズド族は、長のことを 'umm (母) と言っていた。また食事係を彼らの 'umm と呼び習わしていた。一回の食事量を少しにするのは、襲撃が長時間におよび食糧がなくなるのを防ぐためである。以下24行目まで主語が女性となるが、タッパタ・シャッランのことである。

27) sayḥaf' について注釈者は、「先のとがった矢」と「矢尻の幅が広い矢」の二つの意味をあげている。また、'adī については、「戦うために走っている歩兵集団」と説明している。ここでは明らかに敵のことを指していると考えられる。

28) 女性は着物の裾をたくしあげて、向う脛を見せるようなまねはしないが、ここでは、戦士タッパタ・シャッランのことを述べている。また、野生の雄ロバは嫉妬心が強く、雌ロバに近寄る他の雄ロバを追い立てる習性がある。

29) この行には注釈がない。やや散文調で前後の関係も分らない。al-muna'at-i (詩人らに良く描写されている) とあるが、後世に誰かが挿入した一行かもしれない。

30) ベドウィンの詩にはラクダ、羊、山羊、馬などがよく登場するが、ヤマンでは牛が飼われてお

尻尾が林立しているのかと、思うであろう。剣は血を飲んで、渴きを癒し、さらに、もう一飲みしている。

- 28- われ等は、頭髮をゴムで押さえ、生鬢を供えていた巡礼者を殺した。それは、巡礼者らがラッバイカ、ラッバイカと声をあげているミナーの投石場でのことであつた³¹⁾。
- 29- われ等はサラマーン・ブヌ・ムフリジュ³²⁾に借りを返した。それは、彼の手が過去に行った悪行を報復したものである。
- 30- (サラマーン・ブヌ・ムフリジュ) 一族は、(私が生まれ、身代金代わりになるため)、お祭り気分で居たが、私は彼らが気に入らなかった。今や、私は(ファフム)族の中で暮らしているが、それは私の血筋の部族ではない。
- 31- われ等は、戦場で叫び声が上がった時、(サラマーン・ブヌ・ムフリジュ族の) アブド・アッラーとアウフを殺して復讐の熱い渴きを幾分か癒した³³⁾。
- 32- 私に死が訪れる時、(どの様な死に方をしようとも) 私は意に介さない。父母双方ゆかりの叔母たちも涙を流してくれないだろう。
- 33- 私は家庭で仲間たちの中に座り続けるようなことはしない。(そのようにしていると) テントの2本の柱の間から死が私を襲うであろう³⁴⁾。
- 34- 私が、もしも、病気になっても、決して見舞わないでくれ。私を癒してくれるのは、ズー・アルブライカーンの高地で走ることだ³⁵⁾。
- 35- 親切が求められるなら、私は親切に接する。だが、危害を恐れて私を避ける者には苦痛を与える。
- 36- (私を避ける者が) 拒む事柄に対しては、私は毅然とした態度をとる。しかし、私を喜ばせようとする者すべてには、すばやく報いる。

り詩人はこの地方の出身であるから、子牛が母牛を見て尻尾をあげる姿を見ていたのだろう。

- 31) アルアンバーリーのテキスト197-8頁によると、詩人と母と兄弟は、アズド族からファフム族のアルハーリス・ブヌ・アッサーイブ al-Hārith b. al-Sa'ib に引き渡された。それは、後者の庇護のもとにあったアズドの男をアズドが殺したのを補償するためであった。詩人は以後、自分を受け入れ育ててくれたアルハーリスを実の父のように思うようになり、ファフムとアズドとの戦いでは、ファフムの戦士として、出身部族に対抗した。ところが、ある静いでアズドはアルハーリスを殺し、その血債の支払いを拒んでいたが、アズドのハラーム・ブヌ・ジャービル Ḥarām b. Jābir なる者が支払った。詩人は成長してから、巡礼者に混じってミナーを訪れたときに、ハラームが居るのを聞いて、これを殺し、並み外れた走力を利して逃げ延びた。とあり、この一行の背景としている。
- 32) 詩人はアズド系 al-Hijr 族の al-Iwās 家の出であるとされている。おそらく、北部 Sarāt に住んでいたのだろう。サラマーン・ブヌ・ムフリジュはアズドの別系統の部族で、アルヒジュルの隣接地に住んでいた。詩人が殺したハラーム・ブヌ・ジャービルはこの部族の成員。
- 33) 31行は、28行の後に配置すべきもの。
- 34) Lyall 版では、この詩は34行で終わっているが、カイロ版では21、33行が加わり、36行となっている。Lyall 版では追加2行は脚注でも取り上げている。詩人は暴力と流血に明け暮れた人物で、テントで暮らすよりは荒野で過ごすことを好み、荒野での死を望んでいた。
- 35) 彼は罪を重ねているので人々の追及を恐れ、荒野から離れられなかった。

— (XXI) アルムハッバル・アッサアディー —

الْمُخَبِّلُ السَّعْدِيُّ

まえがき

「ムハッバル mukhabbal」というあだ名は、悲嘆または失恋などが原因で関節が弛緩し精神異常をきたした者の意味。詩人の本名は Rabī b. Mālik b. Rabī'a b. 'Anf al-Nāqa でクンヤは 'Abū Yazīd、タミーム系の雄族 Sa'd b. Zayd Manāt の成員であった。今日、クウェートがあるあたりを本拠としていた。本詩集 No.IV でふれた 'Anf al-Nāqa 家の出身である。

この詩に登場する恋人 al-Rabāb も同家の出である。彼はイスラーム時代まで長生きし、イスラームに入信した mukhadrim 詩人である。入信後は故郷に近いバスラに住んだ。『歌の書』(12-40,45)によると、彼はウマルまたはウスマーンの治世時に没した。本詩集 No. XXII, XXIII, XXVI に取り上げられている詩人たちはいずれも彼と同族、同時代の詩人である。この詩はジャーヒリーヤ時代の作品にイスラームに入信後、一部手を加えている跡がうかがえる。(39-40行)

1-10行：恋人が幻となってあらわれることや、過去の思い出、廃墟となった住まいなどについて詠んでいる。11-20行：恋人の魅力に触れる。21-34行：旅とラクダについて述べている。最後の部分は気前よさの欠如の批判に対して反論し、加えて神の全能性を述べている。kāmil 調、40行。

No. XXI から XXIII までの3名の詩人は、以下の名前からも分かる通り、いずれもタミーム Tamīm 系の雄族サアド Sa'd 族の出で、イスラーム時代まで生きのびた mukhadrim 詩人であるが、イスラームの影響は片鱗しか認められない。

XXI- الْمُخَبِّلُ أَبُو يَزِيدَ : رَبِيعُ بْنُ مَالِكِ بْنِ رَبِيعَةَ بْنِ قَتَالِ بْنِ أَنْفِ الثَّاقِفِ بْنِ قُرَيْعِ بْنِ عَوْفِ
بْنِ كَعْبِ بْنِ سَعْدِ بْنِ زَيْدِ مَنَاةَ بْنِ تَمِيمِ

XXII- سَلَامَةُ بْنُ جَنْدَلِ بْنِ عَمْرٍو بْنِ عُيَيْنَةَ بْنِ الْحَارِثِ مُقَاعِسِ بْنِ عَمْرٍو بْنِ كَعْبِ بْنِ سَعْدِ
بْنِ زَيْدِ مَنَاةَ بْنِ تَمِيمِ

XXIII- عَمْرٍو بْنُ الْأَهْتَمِ : عَمْرٍو بْنُ سِنَانِ (الْأَهْتَمِ) بْنِ سُمَيِّ بْنِ سِنَانِ بْنِ خَالِدِ بْنِ عُيَيْنَةَ بْنِ
الْحَارِثِ مُقَاعِسِ بْنِ عَمْرٍو بْنِ كَعْبِ بْنِ سَعْدِ بْنِ زَيْدِ مَنَاةَ بْنِ تَمِيمِ

(XXI) テキスト

قَالَ الْمُخَبِّلُ السَّعْدِيُّ

- ١- ذَكَرَ الرَّبَّابَ وَذَكَرَهَا سَقَمُ فَصَبَا وَلَيْسَ لِمَنْ صَبَا حِلْمُ
٢- وَإِذَا أَلَمَ خَيَالُهَا طُرِفَتْ عَيْنِي فَمَاءُ شُؤْنِهَا سَجَمُ

- ٣- كَاللُّؤْلُؤِ الْمَسْجُورِ أُغْفِلَ فِي
- ٤- وَأَرَى لَهَا دَارًا بِأَغْدِرَةِ الْ
- ٥- إِلَّا رَمَادًا هَامِدًا دَفَعَتْ
- ٦- وَبَقِيَّةَ النَّوْيِ الَّذِي رُفِعَتْ
- ٧- فَكَأَنَّ مَا أَبْقَى الْبَوَارِحُ وَالْ
- ٨- تَقَرُّو بِهَا الْبَقَرُ الْمَسَارِبُ وَآخُ
- ٩- وَكَأَنَّ أَطْلَاءَ الْجَادِرِ وَالْ
- ١٠- وَلَقَدْ تَحُلُّ بِهَا الرَّبَابُ لَهَا
- ١١- بَرْدِيَّةٌ سَبَقَ النَّعِيمُ بِهَا
- ١٢- وَتُرِيكَ وَجْهَهَا كَالصَّحِيفَةِ لَا
- ١٣- كَعَقِيلَةِ الدَّرِّ اسْتَضَاءَ بِهَا
- ١٤- أَعْلَى بِهَا ثَمًّا وَجَاءَ بِهَا
- ١٥- يَلْبَانِهِ زَيْتٌ وَأَخْرَجَهَا
- ١٦- أَوْ بَيْضَةِ الدَّعْصِ النَّبِيِّ وَضِعَتْ
- ١٧- سَبَقَتْ قَرَائِنَهَا وَأَدْفَأَهَا
- ١٨- وَيَضُئُهَا دُونَ الْجَنَاحِ بِدَقِّهِ
- ١٩- لَمْ تَعْتَذِرْ مِنْهَا مَدَافِعُ ذِي
- ٢٠- وَتُضِلُّ مَدْرَاهَا الْمَوَاشِطُ فِي
- ٢١- هَلَّا تُسَلِّي حَاجَةً عَلِقَتْ
- ٢٢- وَمُعَبَّدٍ قَلْبِ الْمَجَازِ كَبَا
- ٢٣- لِلْقَارِبَاتِ مِنَ الْقَطَا نُقِرُّ
- ٢٤- عَارِضَتُهُ مَلَكَ الظَّلَامِ بِمِذْ
- ٢٥- تَذَرُ الْخَصَى فَلَقَا إِذَا عَصَفَتْ
- ٢٦- قَلِقَتْ إِذَا انْحَدَرَ الطَّرِيقُ لَهَا
- ٢٧- لَحِقَتْ لَهَا عَجُزٌ مُؤَيَّدَةٌ
- سِلْكِ النَّظَامِ فَخَانَهُ النَّظْمُ
- سَيِّدَانِ لَمْ يَدْرُسْ لَهَا رَسْمُ
- عَنْهُ الرِّيَّاحُ خَوَالِدُ سُحْمُ
- أَعْضَادُهُ فَتَوَى لَهُ جِذْمُ
- أَمْطَارُ مِنْ عَرَصَاتِهَا الْوَشْمُ
- تَلَطَّطَتْ بِهَا الْآرَامُ وَالْأُدْمُ
- غَزْلَانِ حَوْلَ رُسُومِهَا الْبَهْمُ
- سَلَفَتْ يَفْلُ عَدُوَّهَا فَخْمُ
- أَقْرَانِهَا وَعَلَا بِهَا عَظْمُ
- ظَمَانُ مُخْتَلَجٌ وَلَا جَهْمُ
- مِخْرَابِ عَرْشِ عَزِيزِهَا الْعُجْمُ
- شَخْتُ الْعِظَامِ كَأَنَّهُ سَهْمُ
- مِنْ ذِي غَوَارِبِ وَسَطَهُ اللَّحْمُ
- فِي الْأَرْضِ لَيْسَ لِمَسَّهَا حَجْمُ
- قَرِدُ الْجَنَاحِ كَأَنَّهُ هِدْمُ
- وَتَحْفُفُهُنَّ قَوَادِمُ قُتْمُ
- ضَالٍ وَلَا عُقْبٌ وَلَا الرُّخْمُ
- جَعْدٍ أَغَمَّ كَأَنَّهُ كَرْمُ
- عَلَقَ الْقَرِينَةَ حَبْلُهَا جِذْمُ
- رِيَّ الصَّنَاعِ إِكَامُهُ دُرْمُ
- فِي حَافَتَيْهِ كَأَنَّهُا الرِّقْمُ
- عَانَ الْعَشِيِّ كَأَنَّهُا قَرْمُ
- وَجَرَى بِحَدِّ سَرَابِهَا الْأُكْمُ
- قَلَقَ الْمَحَالَةَ ضَمَّهَا الدَّعْمُ
- عَقَدَ الْفَقَارِ وَكَاهِلُ ضَخْمُ

- ۲۸- وَقَوَائِمٌ عُوجٌ كَأَغْمِدَةِ الْـ
 بُنْيَانِ عُولِي فَوْقَهَا اللَّحْمُ
 ۲۹- وَإِذَا رَفَعْتُ السَّوْطَ أَفْرَعَهَا
 تَحْتَ الضُّلُوعِ مُرَوِّعٌ شَهْمُ
 ۳۰- وَتَسُدُّ حَاذِيَهَا بِذِي خُصَلٍ
 عُقِمَتْ فَنَاعَمَ نَيْتُهُ الْعُقْمُ
 ۳۱- وَلَهَا مَنَاسِمٌ كَالْمَوَاقِعِ لَا
 مُعَرَّ أَشَاعِرُهَا وَلَا دُرْمُ
 ۳۲- وَثَقِيلٌ فِي ظِلِّ الْخَبَاءِ كَمَا
 يَغْشَى كِنَاسَ الصَّلَاةِ الرَّثْمُ
 ۳۳- كَتَرِيكَةِ السَّيْلِ الَّتِي تُرَكَتْ
 بِلَيْثُهَا حَتَّى أُودِّيَهَا
 ۳۴- وَتَقُولُ عَاذِلَتِي وَلَيْسَ لَهَا
 إِنْ الثَّرَاءُ هُوَ الْخُلُودُ وَإِ
 ۳۵- إِنْ نِي وَجَدْتُكَ مَا تُخَلِّدُنِي
 بَشَفَا الْمَسِيلِ وَدُونَهَا الرِّضْمُ
 ۳۶- وَلَيْسَ بَنِيَّتِي لِي الْمَشَقَّرُ فِي
 رَمِّ الْعِظَامِ وَيَذْهَبُ اللَّحْمُ
 ۳۷- وَتَقُولُ عَاذِلَتِي وَلَيْسَ لَهَا
 بَشَفَا الْمَسِيلِ وَدُونَهَا الرِّضْمُ
 ۳۸- وَلَيْسَ بَنِيَّتِي لِي الْمَشَقَّرُ فِي
 رَمِّ الْعِظَامِ وَيَذْهَبُ اللَّحْمُ
 ۳۹- وَتَقُولُ عَاذِلَتِي وَلَيْسَ لَهَا
 بَشَفَا الْمَسِيلِ وَدُونَهَا الرِّضْمُ
 ۴۰- إِنْ نِي وَجَدْتُكَ الْأَمْرَ أَرْشَدُهُ
 نَ الْمَرْءُ يُكْرِبُ يَوْمَهُ الْعُدْمُ
 مَائَةً يَطِيرُ عَفَاؤُهَا أَذْمُ
 هَضْبٍ تُقْصِرُ دُونَهُ الْقُصْمُ
 نَ اللَّهُ لَيْسَ كَحُكْمِهِ حُكْمُ
 تَقْوَى الْإِلَهِ وَشَرُّهُ الْإِثْمُ

(XXI) 訳

- 1- 彼はアッラバーブ³⁶⁾に想いを寄せたが、過去の女を想うのが彼の病である。若者の情熱に身をゆだねるような者には分別は備わっていない。
- 2- 彼女の幻が私に近づくと、私の目は傷を受け、涙つばから涙が流れる。
- 3- それはまるで紐から落ちる真珠のようだ。紐に不用意に真珠を通したが、紐が切れてしまったのである。
- 4- 私はアッシーダーン³⁷⁾の沼沢地で、彼女がかつて暮らしていた住まいの跡を見たが、その跡はまだ完全には消えていなかった。
- 5- 黒味を帯びた鼎石が、火の消えた灰を、飛び散らかす風から守っていた³⁸⁾。
- 6- テントに水が入るのを防ぐ溝の両側の盛り土が残っていて、溝の底がかつての姿

36) 詩人の恋人名アッラバーブ al-Rabāb には「白雲」という意味がある。なお、1行目において詩人は自身を3人称としているが、2行目からは1人称としている。

37) al-Sīdān はクウェート近くのペルシャ湾に臨むサアド族の土地。湖沼が多く、どこを掘っても水が出るが、アッシーダーンは高所にあった。なお、住居の跡が残っている方が詩人の悲しみが強いとされている。

38) yillā を接続詞 wa-と理解するのはクーファ学派の説。4行目で lam ya-drus (まだ消えていない) とあり、yillā を例外の意味で取ると、意味が一貫しなくなる。おそらく詩人は4行目のことを念頭におかず、これを使ったものであろう。つまり、跡形はないが灰だけが残っていたと言いたかったのではないだろうか。

を留めているのを見た。

- 7- 夏の強い北風や雨が、テントの前の広場に残している光景は、刺青³⁹⁾のようであった。
- 8- その広場に草を求めて野生の牛の群れがやって来るが、その中には、腹が白く背中が褐色の山岳カモシカや、全身が白い平原カモシカ⁴⁰⁾が混ざっている。
- 9- 廃墟の周りにいる野牛やカモシカの子らは、まるで、子ヤギのように跳ね回っている。
- 10- アッラバーブはこの廃墟となったテントに住んでいたが、そこには敵を敗走させるために先遣された騎馬大隊が控えていた⁴¹⁾。
- 11- 彼女はパピルスの茎のように清らかで、恵まれて暮らしてきたので、同年の娘たちよりも、大きく育っていた。
- 12- 彼女は君に羊皮紙のような、柔らかで滑らかな顔を見せる。それは干からびて瘦せたものでもなく、また醜く肥満したものでもない。
- 13- 彼女は、ペルシャ人らが、王の玉座が置かれている上座を照らす最良の真珠のようである。
- 14- それは、矢のように細身で、身ごなしが素早い男（潜水夫）が採ってきた真珠で、王が大金を払って買い取ったものである。
- 15- 彼の胸には油が塗られており、この真珠はサメ⁴²⁾が住んでいる海中から取り出したものである。
- 16- あるいは、彼女は（砂の小山の地面に）そっと産み落とされたダチョウの卵のようで、手で触れても滑らかである。
- 17- それは他に先んじて生れた初卵で、雄ダチョウ⁴³⁾が古着のような分厚い翼で温めたものである。
- 18- 雄ダチョウはその卵を翼の下に横腹に包み込み、茶色がかった前羽で他の卵を抱えこんで（温める）。
- 19- 奔流が谷間に降るズー・ダールの川床やウカブやアッズフムには彼女が住んでいたテントの跡が消えずに残っている。

39) 廃墟の跡を刺青模様と描く例は、ズハイルの *mu'allāqa* 2行目及びラビードの *mu'allāqa* 9行目にも見られる。

40) カモシカを2種あげているが、背が褐色のほうは「山岳カモシカ」、白いほうは「平原カモシカ」であり、住居跡が山と平原の境にあったことを物語る。

41) *salaf* は他の場所に移る際、道中に危険がないか調べ、あればこれを排除する先遣騎馬隊をさす。*al-Rabāb*（詩人の恋人の名）を、*al-rabba* の複数 *al-ribāb*（集団）と読んだほうが素直な読みのように思える。すなわち、（彼女の）一族集団はそこに住み、先遣大部隊を擁していた。しかし、テキストでは前者の読みとなっている、この一行は前後とつながりがそぐわないものである。

42) *lukhm* については諸説あり、「カエル」「海の獣」「大魚」などの意味があげられている。カイロ版では *qirsh*（サメ）とあり、これに従った。*ghawārib* とは「波頭」のことで、*dhū al-ghawārib* は海のこと。

43) 若い美女をダチョウの玉子に喩えるのは、詩人らのよくするところで、イムルウ・ル・カイスの *mu'allāqa* 41行にその例がある。なお、この一行と20行の頭髮の豊かさの部分はイムルウ・ル・カイスからの借用かもしれない。

- 20- 髪結い女はブドウの樹のように絡み合った彼女の濃いちじれ毛⁴⁴⁾の中に櫛を見失う。
- 21- 何故（過ぎし日の彼女の思慕の念を断ち切って）旅に出ないのか。もっとも、それは二頭のラクダを結び付けている短い綱のように強く結合した関係であったが⁴⁵⁾。
- 22- 多くの道は、腕利きの職人が織った敷物のように踏み固められて平坦であり、（道標の）盛り土も平らになり、（ために、迷いやすく）休息地もないので、旅人は不安に駆られ道を急ぐ。
- 23- 道の両側には砂ライチョウ⁴⁶⁾が水場から一夜行程の所に休息用に作った巢穴があるが、それは、まるで、地表に円形の模様を描いているかのようだ。
- 24- 私は（迷わないように）道の側面に沿って、闇がせまる黄昏時、休息十分な雄ラクダのように元気な雌ラクダに乗って進んだ。この雌ラクダは夕方になってもよく服従し、速度を上げて旅をした⁴⁷⁾。
- 25- 雌ラクダが疾風のように駆ける時には、石の破片が後ろに飛び散り、あたりの小山の群れがラクダの蜃気楼⁴⁸⁾の端を駆けて行くように見える。
- 26- 道路が下り坂になると、雌ラクダは支柱に囲まれた（井戸の）滑車が素早く動いているように、速度を上げて駆け下る。
- 27- 雌ラクダの強い臀部は背骨にしっかりと結合していて、肩甲骨の間の隆起部分は大きい。
- 28- 四肢は程よく曲がっていて建物の柱のように長い。その表面を薄い肉が覆っている⁴⁹⁾。
- 29- 私が鞭を揚げると、肋骨の下に活発な心臓がラクダの感情を刺激し、（速度を上げて走り始める）。
- 30- ラクダは股間の下を、ふさふさとした尾で塞ぐ。不妊ラクダであるため尾の毛が豊かなのである⁵⁰⁾。

44) ちじれ毛の頭髮は薄いとされているが、濃いとよく褒められている。

45) これは、かつての恋人への思慕の念の重荷から解放されようとして、ラクダに乗って旅に出るという常套的表現であるが、20行目との間に何行かの脱落があると思われる。ここで、hāja（用件）とは、恋人へのかつての思いにとらわれる重荷のこと。これから解放され、あらたに幸福を探し求めるよ、と言っていると説明されている。

46) qatā（砂ライチョウ）は水を求めて夜通し飛ぶと言われている。次の水場が離れすぎているときには途中で地面に降り穴を開けて休息する。すなわち、詩人が水場から遥かに離れているところを旅していることを暗示しているのである。

47) midh'ān al-'ashī とは、日中旅をし、疲れを知らず夕方になっても言いつけどおり速度を衰えさせない雌ラクダのこと。昼について夜も旅をしたことを仄めかしている。

48) 蜃気楼は昼間の酷暑に現れる現象で、この時刻全速力で走るのは難事であり、ラクダの能力を褒めた誇張表現。今ひとつの解釈は「ラクダの蜃気楼が小山のふちを走っているように見える」というもので、この場合は jarā（走った）の主語を al-sarāb（蜃気楼）とみなすことになる。もしそうであれば、他の語を主語と見せかける特異な発話方式となる。

49) 四肢の骨が頑強で贅肉がついておらず、疾駆するのに適した曲がり具合という意味。

50) アルアスマイーは、立派なラクダの尾は毒蛇の尻尾のように毛がないので、詩人は間違っていると批判しているが、タラファの mu'allāqa 15-16行では、ふさふさとした尾を持つラクダを褒めており、この批判はあたらない。

- 31- ラクダの足裏は槌のように頑強で、蹄を覆う毛は不足しておらず、贅肉もついていない。
- 32- ラクダはテントの日陰に入って昼寝する。ちょうどカモシカがシドラ（樹）の根元にねぐらを求めるようだ。
- 33- （昼寝をしているラクダの姿は）まるで、洪水が運んできて水路の端に留まっている岩のようで、他の石はその背後に集積している。
- 34- 私はこのラクダを（長旅で）酷使し、骨が腐り、肉が失われ、死んでしまったかと思えるほどに疲れさせた。
- 35- 私を咎める女は、明日のこともその後のことも知らないにもかかわらず、言う。
- 36- まことに、富は永遠だ（富があれば長生きできる）、貧困は人を死なせる、と。
- 37- 私はわが祖父に誓って言おう。軟毛が風で飛ぶような太った純白のラクダ百頭とて、私に永遠の命を授けてはくれない。
- 38- たとえ、そなたが脚が白い野生のヤギすら登れない岩山の上にアルムシャッカル⁵¹⁾のような宮殿を私のために建ててくれてもだ。
- 39- （その宮殿の中にあっても）死は私を探し出す。まことに、神の判定に匹敵する判定はないのだ。
- 40- 私は、最善の生き方は敬神の念を抱くこと、最悪のそれは罪悪を犯すことと心得ているのだ、と。

51) al-mushaqqar : ササン朝ペルシャの総督がアルバハレーンに建てた城砦宮殿のこと。

— (XXII) サラーマ・ブヌ・ジャンダル・アッサアディー —

سَلَامَةُ بْنُ جَنْدَلٍ السَّعْدِيِّ

まえがき

詩集 *al-ʿAṣmaʿīyāt* No. 8にこの詩人の詩とされるものがあるが、これによると彼はラフム朝の最後の王 *al-Nuʿmān ʿAbū Qābūs* の没年 A.D. 602-607頃まで生きていたことになる。*al-ʿAṣmaʿīyāt* の校訂者 Ahlwardt は *Salāma* の詩に、*raḥmān* (慈愛厚きお方) という単語が使われている所から、彼はムスリムになったと見なしている。

『歌の書』は彼を取り上げていないが、『詩と詩人たち』では、彼を「ジャーヒーリーヤ時代の古詩人 *jāhili qadīm*」としている。すなわち、彼は、タグリブ族のムアッラカ詩人で、ラフム朝のアムル・ブヌ・ヒンド王 (A.D. 569没) の殺害者とされているアムル・ブヌ・クルスームと同時代人となっている。

彼はムカーイス *Muqāʿis* 一家に属し部族の傑出した戦士でもあった。彼の一家は第二次 *yawm al-kulāb* (A.D. 612頃) の戦いでタミーム族を率いた族長カイス・ブヌ・アースィム *Qays b. ʿĀsim* を出している。この戦いでは詩人の名は見当たらないが、*yawm jadūd* の戦いでは、カイスに従って戦闘に参加し、バクル族を敗走させている (*ʿAyyām al-ʿArab* p.178)。カイスは晩年イスラームに改宗しているので、この詩人も生きていたならば、改宗していた可能性がある。

この詩は本詩集の中では優れたものとされ、特に馬の描写がよいとされている。
basīṭ 調、39行。

(Lyall 校訂の *al-ʿAnbārī* の注釈書では32行となっているが、ʿAḥmad Muḥammad Shākir らによるカイロ版では39行となっている。これは後者が、ウィーンならびに大英博物館の写本、および1910年の *Salāma* の詩集 (ペイルート版) などを参照して追加された7行が加わっているためである。このため本訳はカイロ版によった。)

(XXII) テキスト

قَالَ سَلَامَةُ بْنُ جَنْدَلٍ السَّعْدِيِّ

- | | | |
|---|----|--|
| أَوْدَى الشَّبَابُ حَمِيدًا ذُو التَّعَاجِبِ | ١- | أَوْدَى وَذَلِكَ شَأْوٌ غَيْرُ مَطْلُوبٍ |
| وَلَّى حَيْثًا وَهَذَا الشَّيْبُ يَطْلُبُهُ | ٢- | لَوْ كَانَ يَذْرِكُهُ رَكْضُ الْيَعَاقِبِ |
| أَوْدَى الشَّبَابُ الَّذِي مَجْدٌ عَوَاقِبُهُ | ٣- | فِيهِ نَلْدٌ وَلَا لَذَاتٍ لِلشَّيْبِ |
| وَلِلشَّبَابِ إِذَا دَامَتْ بَشَاشَتُهُ | ٤- | وُدُّ الْقُلُوبِ مِنَ الْبَيْضِ الرَّعَائِبِ |
| إِنَّا إِذَا غَرَبَتْ شَمْسٌ أَوْ ارْتَفَعَتْ | ٥- | وَفِي مَبَارِكِهَا بُزْلُ الْمَصَاعِبِ |
| قَدْ يَسْعَدُ الْجَارُ وَالضَّيْفُ الْغَرِيبُ بِنَا | ٦- | وَالسَّائِلُونَ وَنُفْلِي مَيْسِرِ النَّيْبِ |

- ٧- وَعِنْدَنَا قَيْنَةٌ بَيْضَاءُ نَاعِمَةٌ
 ٨- تُجْرِي السَّوَاكَ عَلَى غُرٍّ مُفْلَجَةٍ
 ٩- دَغْ ذَا وَقُلْ لِبَنِي سَعْدٍ لِفَضْلِهِمْ
 ١٠- يَوْمَانِ يَوْمٌ مُقَامَاتٍ وَأُنْدِيَّةٍ
 ١١- وَكَرْنَا خَيْلَنَا أَذْرَاجَهَا رُجْعًا
 ١٢- وَالْعَادِيَاتِ أَسَابِي الدِّمَاءِ بِهَا
 ١٣- مِنْ كُلِّ حَتٍّ إِذَا مَا ابْتَلَّ مُلْبَدُهُ
 ١٤- يَهْوِي إِذَا الْخَيْلُ جَارَتْهُ وَثَارَ لَهَا
 ١٥- لَيْسَ بِأَسْفَى وَلَا أَقْصَى وَلَا سَغِلٍ
 ١٦- فِي كُلِّ قَائِمَةٍ مِنْهُ إِذَا انْدَفَعَتْ
 ١٧- كَأَنَّهُ يَرْفِي نَامَ عَنْ غَنَمٍ
 ١٨- يَرْقَى الدَّسِيعَ إِلَى هَادٍ لَهُ بَتَعٍ
 ١٩- تَظَاهَرَ النَّيُّ فِيهِ فَهُوَ مُحْتَفِلٌ
 ٢٠- يُحَاضِرُ الْجُونَ مُخَضَّرًا جَحَافِلَهَا
 ٢١- كَمْ مِنْ فَقِيرٍ بِإِذْنِ اللَّهِ قَدْ جَبَرَتْ
 ٢٢- مِمَّا تُقَدِّمُ فِي الْهَيْجَا إِذَا كُرِهَتْ
 ٢٣- هَمَّتْ مَعْدُ بِنَا هَمًّا فَتَهْنَهَهَا
 ٢٤- بِالْمَشْرِفِيِّ وَمَصْقُولٍ أَسْنَتْهَا
 ٢٥- يَجْلُو أَسْنَتْهَا فِتْيَانُ عَادِيَةٍ
 ٢٦- سَوَى الثَّقَافُ قَنَاهَا فَهِيَ مُحْكَمَةٌ
 ٢٧- زُرْقًا أَسْنَتْهَا حُمْرًا مُثَقَّفَةٌ
 ٢٨- كَانَتْهَا بِأَكْفِ الْقَوْمِ إِذْ لَحِقُوا
 ٢٩- كَلَا الْفَرِيقَيْنِ أَعْلَاهُمْ وَأَسْفَلُهُمْ
 ٣٠- إِنِّي وَجَدْتُ بَنِي سَعْدٍ يُفَضِّلُهُمْ
 ٣١- إِلَى تَمِيمٍ حُمَاةَ الْعِزِّ نَسَبَتْهُمْ
- مِثْلُ الْمَهَاةِ مِنَ الْحُورِ الْخَرَاعِيهِ
 لَمْ يَغْرَهَا دَنْسٌ تَحْتَ الْجَلَابِيهِ
 مَدْحًا يَسِيرُ بِهِ عَادِي الْأَرَكَبِ
 وَيَوْمٌ سَيْرٌ إِلَى الْأَعْدَاءِ تَأْوِيهِ
 كُسَّ السَّنَابِكُ مِنْ بَدْءٍ وَتَعْقِيهِ
 كَانَ أَعْنَاقَهَا أَنْصَابُ تَرْجِيهِ
 صَافِي الْأَدِيمِ أَسِيلُ الْخَدِّ يُعُوبُ
 هَوِيَّ سَجَلٍ مِنَ الْعَلْيَاءِ مَضُوبُ
 يُعْطَى دَوَاءٌ قَفِي السَّكَنِ مَرْثُوبُ
 مِنْهُ أَسَاوٍ كَفَرَّغَ الدَّلْوُ أَثْعُوبُ
 مُسْتَنْفِرٌ فِي سَوَادِ اللَّيْلِ مَذْذُوبُ
 فِي جُوجُو كَمَدَاكِ الطَّيِّبِ مَخْضُوبُ
 يُعْطَى أَسَاهِيٍّ مِنْ جَرِيٍّ وَتَقْرِيهِ
 وَيَسْبِقُ الْأَلْفَ عَفْوًا غَيْرَ مَضْرُوبُ
 وَذِي غَنَى بَوَائِهُ دَارَ مَحْرُوبُ
 عِنْدَ الطَّعَانِ وَتُنْجِي كُلَّ مَكْرُوبُ
 عَنَّا طِعَانٌ وَضَرْبٌ غَيْرُ تَذْيِيهِ
 صُمَّ الْعَوَامِلِ صَدَقَاتِ الْأَنْبَابِ
 لَا مُقْرِفِينَ وَلَا سُودَ جَعَابِيهِ
 قَلِيلَةُ الزَّيْغِ مِنْ سَنٍّ وَتَرْكِيبِ
 أَطْرَافُهُنَّ مَقِيلٌ لِلْيَعَاسِيهِ
 مَوَاتِحُ الْبَيْرِ أَوْ أَشْطَانُ مَطْلُوبُ
 يَشْقَى بِأَرْمَاحِنَا غَيْرَ التَّكَادِبِ
 كُلُّ شَهَابٍ عَلَى الْأَعْدَاءِ مَشْبُوبُ
 وَكُلُّ ذِي حَسَبٍ فِي النَّاسِ مَسْثُوبُ

- ٣٢- قَوْمٌ إِذَا صَرَخَتْ كَحَلٍّ بُيُوتُهُمْ عَزُّ الدَّلِيلِ وَمَأْوَى كُلِّ قَرْضُوبٍ
 ٣٣- يُنْجِيهِمْ مِنْ دَوَاهِي الشَّرِّ إِنْ أَرَمَتْ صَبْرٌ عَلَيْهَا وَقِيَصٌ غَيْرُ مَحْسُوبٍ
 ٣٤- كُنَّا نَحُلُّ إِذَا هَبَّتْ شَامِيَّةٌ بِكُلِّ وَادٍ حَطِيبِ الْجَوْفِ مَجْدُوبٍ
 ٣٥- شَيْبِ الْمَبَارِكِ مَذْرُوسٍ مَدَافِعُهُ هَابِي الْمَرَاعِ قَلِيلِ الْوَدْقِ مَوْطُوبٍ
 ٣٦- كُنَّا إِذَا مَا أَتَانَا صَارِخٌ فَرِحَ كَانَ الصُّرَاخُ لَهُ قَرَعُ الظَّنَائِبِ
 ٣٧- وَشَدَّ كُورٍ عَلَى وَجَنَاءٍ نَاجِيَةٍ وَشَدَّ سَرَجٍ عَلَى جَرْدَاءٍ سُرْحُوبٍ
 ٣٨- يُقَالُ مَحْبِسُهَا أَدْنَى لِمَرْتَعِهَا وَإِنْ تَعَادَى بِئُكْءٍ كُلُّ مَحْلُوبٍ
 ٣٩- حَتَّى تُرْكُنَا وَمَا تُثْنَى طَعَائِنُنَا يَأْخُذْنَ بَيْنَ سَوَادِ الْخَطِّ فَالْلُوبِ

(XXII) 訳

- 1- 讃えるべき不思議に満ちた青春は過ぎ去り、追い求め得ない過去のものとなってしまった。
- 2- 青春は素早く去り、この白髪頭となった私が、それでもなお、雄ウズラ⁵²⁾のような素早さで飛んで、追いつき、青春を取り戻せばよいのだが。
- 3- 青春は去った。青春がもたらすものは喜ぶべき栄誉である。だが、白髪の老人には楽しみはない。
- 4- 青春の微笑が続けば、色白の美しい乙女らの愛情を受けることができる。
- 5- われらは太陽が沈むときも、昇るときも、何時でも立派な雄ラクダを控えさせている⁵³⁾。
- 6- 隣人も、見知らぬ客も、物乞いもわれ等のもとでは、しばしば、幸運に恵まれる。われ等は、年老いた雌ラクダの占い矢の買値を高くする。
- 7- われ等のもとには、色白でしなやかな歌姫⁵⁴⁾がいる。すらりとした体と、美しい黒い瞳の乙女で、ぱっちりした雌野牛の目のようだ。
- 8- 彼女は爪楊枝で白い歯の隙間を磨くが、長いガウンの下には穢れが付着していない。
- 9- それはさておき、わがサアド族の徳を讃えよ。早朝ラクダに乗って出立する旅人らが賛辞を携えて各地に広めてくれるであろう。
- 10- われらには二種の日がある。すなわち、部族の会議や寄り合いの日と、敵に向かって日がな攻め込む日である。

52) ya'qūb (pl. ya'āqīb) (雄ウズラ) は rakd (疾駆) という単語との関係からか、'umāra は疾駆する馬のこと、としている。すなわち、「それでもなお疾走に疾走を重ねる馬で追いつき」となる。なお、rakd-a と対格で読むのが妥当と思われる。

53) 「ラクダを控えさせる」とは、豊かさを誇示したものと思われる。

54) qayna (歌姫) は奴隷として買われてくるが、持ち主は彼女の純潔を守り、値を下げないように努めた。

- 11- われらは、攻めた時と同じ道を通って、馬を引き上げるが、最初の攻撃と二度目の攻撃で、馬の蹄は磨り減った。
- 12- 早駆けして帰って来る馬（の胸）は（敵の）血で染まっている。馬の首は、まるで、ラジャブ月の生贄を屠る⁵⁵⁾台石のようである。
- 13- どの馬も快速で走り、ために、鞍敷きが汗で濡れる時も、肌は清らかで、頬は滑らかで倦むことなく躍動する⁵⁶⁾。
- 14- これらの馬は他の馬群にやり過ぎされると、激情して、水を張った大きなバケツが高所から落ちるような速さで突進する。
- 15- 馬の前髪は薄くなく、鼻は曲がっておらず、四肢は均整がとれている。馬には賓客用のミルクが与えられ、大切に育てられている。
- 16- 馬のどの脚にも疾駆するたびに、（水槽に）水を満たした大バケツから注がれる水が落下する⁵⁷⁾ようなスピードがある。
- 17- 馬は羊の群れから離れて暗夜眠るが、オオカミに襲われると起きて、用心深く見張る牧童⁵⁸⁾のようである。
- 18- 馬の肩甲骨上の隆起は長い首へとせり上がり、胸は香料の引き石のように滑らかで、血⁵⁹⁾に染まっている。
- 19- 馬の胸には脂身が重なり、盛り上がっていて、駆歩、速歩など多芸である⁶⁰⁾。
- 20- 馬は、唇を牧草で緑に染めた野生の活発なロバに走って競り勝ち、鞭をくわえられることなく千頭の馬を抜き去る。
- 21- （馬は）⁶¹⁾なんと多くの貧者らを、神の許しにより富者とし、なんと多くの富者らを略奪された住まいに住ませたことか。
- 22- 槍の突き合いが激しく、参戦が厭われる時、この馬を先頭に立て騎手は突入する。また、馬はあらゆる難事から身をかわし（騎手を守る）。
- 23- マアッドはわれ等に危害を加えようとした。だが、われ等の槍による突きと、真剣に振りかざす剣により、彼らは追い払われた。

55) ラジャブ月 *rajab* はアラブの古い暦では第7月で5-6月の暑い時期にあたっていた。しかし、預言者の時代より約100年前に、一年の長さを短くしたため、季節がずれるようになった。この月は神聖月で、戦いは禁じられ聖地に生贄が供えられた。また、1910年にペイルートで *Salāma* の詩集を出した *Louis Cheikho* は「ラジャブ月の生贄」とはキリスト教徒の感謝祭の生贄のことで、詩人はキリスト教徒であったと見なしている。しかしながら、アラブは古くからラジャブ月を神聖月とし聖地に生贄を供していたので、これだけではキリスト教徒と即断はできない。

56) 短毛の駿馬に手入れをよくしていることを仄めかせている。

57) 「走る」を「流れる」に喩えるのは、アラブ古詩でよく見られるが、「流れる」が「走る」へと意味が拡張したのに関係がありそうだ。

58) *yarfa'i*: 雄ガチョウのこと。黒いので「エチオピア系の牧童」の意味で使用される。

59) 「血」とは敵や獲物の返り血のこと。

60) 「脂身が重なり、盛り上がっている」というのは完全に仕上がっている馬には当てはまらない表現である。なお、*jary* は駆歩、*taqrīb* はそれよりゆっくりした速歩、その下は *khābab*（同じ側の前足と後ろ足を同時に上げる緩やかな歩み）。

61) 動詞 *jabar-at*（富者にした）の主語は「馬」と考えられるが、騎士を暗示していることは明らかである。

- 24- アルマシュラフ産⁶²⁾の剣と、穂先が磨かれ取っ手の部分に空洞がない柄がついた、節々が強い槍でもって（追い払った）。
- 25- 戦士らは槍の穂先の手入れをする。彼らは奴隷女を母として生まれた混血児ではなく、また、背の低い弱虫の黒人でもない。
- 26- 槍を真っ直ぐにする道具で曲がりをなしているの、槍の曲がりは少なく、よく磨かれた穂先がしっかりと取り付けられ、強固な槍となっている。
- 27- 穂先は青光りしており、柄は真っ直ぐで赤みを帯びている⁶³⁾。穂先は敵将らの首の休息所である。
- 28- 戦士らが敵に追いつくと、手にした槍を、井戸の滑車の綱か、マトループ⁶⁴⁾の井戸の長い綱の早い動きのように、素早く繰り出す。
- 29- 高原と平地に布陣したマアッドの両軍とも、われ等の手加減しない槍に突かれて、打ちひしがれてしまった。
- 30- 私がみたところでは、サアド族の子らは彼ら（マアッド）より優れている。各戦士は燃え上がる炎のように敵に当たる。
- 31- サアド族は、名誉の保護者であるタミーム族の血を引いている。人々の中で由緒ある血統を持つ者はその名誉にあずかる。
- 32- （雨が降らず）不毛の年には、タミーム（または、サアド）族のテントはどん底にあえぐ者たちに力を与え、貧者らの避難所となる。
- 33- 最悪の災難が囂みついたとき、（われ等はこれに）耐え、数えきれない人数で、彼らを救う。
- 34- 冷たい北風が吹くと、われ等はどの谷間にもテントを張るのが常であった。すなわち、飢餓のとき、谷間には、家畜を料理する薪が多くあるからだ。
- 35- 谷間⁶⁵⁾は灰色で、川筋は消え、土埃がうず高く積もっており、ラクダが寝転んだ跡もなく、雨が降らず、不毛が続いた景色となっている。
- 36- 誰かが怯えてわれ等に救いを求めてくれば、ラクダの足を棒でたたいて座らせて乗り、急いで助けに向かうのが常であった。
- 37- すなわち、俊足の大型の雌ラクダに鞍を乗せ、長身短毛の雌馬にも鞍を乗せて、救援に赴いたのである。
- 38- 人々は馬を餌場近くにとどめ、ラクダの乳を飲ませている。たとえ、ラクダの乳の量がわずかになるのが続いても、馬には自由に草を食べさせないと言っている。

62) al-mashrafi については、本詩集 No. XII, 10行（『アラブ・イスラム研究』9, p.21）を参照のこと。また、アラブの槍の柄はインドから輸入した竹が材料とされ、空洞のない竹が最高とされた。

63) アルアンバーリーでは、「よく磨かれた穂先は青光りがし、赤色が混じって見える」と書かれているが、青は槍の穂先、赤はインド産の柄の色として訳した。敵の首領たちを捕らえて殺して、首を穂先に掲げた。

64) Maṭlūb: メッカとシリアの間にある深い井戸。カイロ版ではメディナとシリアの間の井戸となっている。槍のすばやい突きは井戸の滑車の綱の早い動きによく比せられる。

65) mabārik: ラクダがうずくまる場所が本来の意味であるが、ここでは谷間全体の意味で用いられている。

る⁶⁶⁾。

- 39- (われらは有力で) 何人も手出しができない。それゆえ、われらのラクダに乗った女たちは、アルハット⁶⁷⁾の平原から黒い火山岩のある丘陵地の間に広がる広大な土地を邪魔されずに旅をすることができる。

66) 馬を大切に育てていることを述べたもの。

67) al-Khatt は、アルバハレーンの海に臨むところに位置し、槍の柄となる竹をインドから輸入していたことで有名である。

— (XXIII) アムル・ブヌ・アルアフタム・ブヌ・スマイユ・

アッサアディー・アルミンカリー —

عَمْرُو بْنُ الْأَهْتَمِ بْنِ سُمَيِّ السَّعْدِيِّ الْمِنْقَرِيِّ

まえがき

この詩人はタミーム系のサアド族の族長で、第二次 yawm al-kulāb (A.D. 612頃) の戦いを指揮したカイス・ブヌ・アースィム Qays b. ʿĀṣim の一族であった。ヒジュラ暦9年に、タミーム族の代表として預言者に会い、イスラームの信者になった。『歌の書』4-8,10) 彼の娘 ʿUmm Ḥabīb は Ḥasan b. ʿAlī と結婚したが、後に離婚された。

父の名は Sinān であるが、al-ʾAhtam (前歯を失った男) と呼ばれるようになった。それは、yawm al-kulāb の戦いで、一撃を受け、前歯を折られたためにつけられたあだ名とされている。この詩人の作は本詩集 No. CXXIII にも載せられている。

以下の詩は、彼がイスラームに入信してから詠んだものであろう。ナシーブは1-3行と短く、4行目には、ʿUmm Haytham という女性が登場するが、彼女は恋人ではなく、詩人の浪費癖などを非難する者であり、おそらく、大幅な欠落部分があるものと思われる。12-17行には立派な雌ラクダを殺して客をもてなす場面があり、アラブが高く評価するところである。ṭawīl 調、23行。

(XXIII) テキスト

قَالَ عَمْرُو بْنُ الْأَهْتَمِ بْنِ سُمَيِّ السَّعْدِيِّ الْمِنْقَرِيِّ

- | | |
|---|--|
| 1- أَلَا طَرَقَتْ أَسْمَاءُ وَهِيَ طَرُوقُ | وَبَانَتْ عَلَى أَنَّ الْخِيَالَ يَشُوقُ |
| 2- بِحَاجَةٍ مَحْزُونٍ كَأَنَّ فُؤَادَهُ | جَنَاحٌ وَهِيَ عَظْمَاهُ فَهَوَ خَفُوقُ |
| 3- وَهَانَ عَلَى أَسْمَاءَ أَنْ شَطَبَ النَّوَى | يَجِنُّ إِلَيْهَا وَالِةٌ وَيَتُوقُ |
| 4- ذَرِيَّتِي فَإِنَّ الْبُخْلَ يَا أُمَّ هَيْثَمَ | لِصَالِحِ أَخْلَاقِ الرَّجَالِ سَرُوقُ |
| 5- ذَرِيَّتِي وَحُطِّي فِي هَوَايَ فَإِنِّي | عَلَى الْحَسَبِ الزَّاكِي الرَّفِيعِ شَفِيقُ |
| 6- وَإِنِّي كَرِيمٌ ذُو عِيَالٍ تُهْمُنِي | نَوَائِبُ يَغْشَى رُزْؤَهَا وَحُقُوقُ |
| 7- وَمُسْتَنْبِحٌ بَعْدَ الْهُدُوءِ دَعْوَتُهُ | وَقَدْ حَانَ مِنْ نَجْمِ الشَّتَاءِ خَفُوقُ |
| 8- يُعَالِجُ عَرِيزَنَا مِنَ اللَّيْلِ بَارِدًا | تَلَفٌ رِيَّاحٌ ثَوْبُهُ وَبُزُوقُ |
| 9- تَأَلَّقْتُ فِي عَيْنٍ مِنَ الْمُزْنِ وَادِقِ | لَهُ هَيْدَبٌ دَانِي السَّحَابِ دَفُوقُ |
| 10- أَضَفْتُ فَلَمْ أَفْجِشْ عَلَيْهِ وَلَمْ أَقْلُ | لِأَخْرَمِهِ إِنَّ الْمَكَانَ مَضِيقُ |

- ١١- فَقُلْتُ لَهُ أَهْلًا وَسَهْلًا وَمَرْحَبًا
 ١٢- وَقُمْتُ إِلَى الْبَرْكِ الْهَوَاجِدِ فَاتَّقَمْتُ
 ١٣- بِأَذْمَاءِ مِرْبَاعِ النَّجَاجِ كَانَهَا
 ١٤- بِضَرْبَةِ سَاقٍ أَوْ بِنَجْلَاءِ ثَرَّةٍ
 ١٥- وَقَامَ إِلَيْهَا الْجَارِرَانِ فَأَوْفَدَا
 ١٦- فَجُرَّ إِلَيْنَا ضَرْعُهَا وَسَنَامُهَا
 ١٧- بَقِيرٌ جَلَا بِالسَّيْفِ عَنْهُ غِشَاءُهُ
 ١٨- قَبَاتٌ لَنَا مِنْهَا وَلِلضَّيْفِ مَوْهِنًا
 ١٩- وَبَاتَ لَهُ دُونَ الصَّبَا وَهِيَ قَرَّةٌ
 ٢٠- وَكُلُّ كَرِيمٍ يَنْقِي الدَّمَ بِالْفِرَى
 ٢١- لَعَمْرُكَ مَا ضَاقَتْ بِلَادٌ بِأَهْلِهَا
 ٢٢- نَمْتَنِي عُرُوقٌ مِنْ زُرَّارَةٍ لِلْعُلَى
 ٢٣- مَكَارِمُ يَجْعَلْنَ الْفَتَى فِي أَرْوَمَةِ
- فَهَذَا صَبُوحٌ رَاهِنٌ وَصَدِيقُ
 مَقَاحِدُ كُومٌ كَالْمَجَادِلِ رُوقُ
 إِذَا عَرَضَتْ دُونَ الْعِشَارِ فَيَتَّقُ
 لَهَا مِنْ أَمَامِ الْمُنْكَبِينَ فَيَتَّقُ
 يُطِيرَانِ عَنْهَا الْجِلْدَ وَهِيَ تَفُوقُ
 وَأَزْهَرُ يَحْبُو لِلْقِيَامِ عَتِيقُ
 أَخٌ بِإِخَاءِ الصَّالِحِينَ رَفِيقُ
 شِوَاءٌ سَمِينٌ زَاهِقٌ وَغُبُوقُ
 لِحَافٌ وَمَصْفُوقُ الْكِسَاءِ رَفِيقُ
 وَلِلْخَيْرِ بَيْنَ الصَّالِحِينَ طَرِيقُ
 وَلَكِنَّ أَخْلَاقَ الرِّجَالِ تَضِيقُ
 وَمِنْ فَدَكِيٍّ وَالْأَشَدُّ عُرُوقُ
 يَفَاعٍ وَبَعْضُ الْوَالِدِينَ دَقِيقُ

(XXIII) 訳

- 1- アスマーウ（の幻）が夜になると、しばしば私を訪ねて来るではないか。その幻が彼女への慕情を掻き立てたまま、去ってしまった。
- 2- 彼女は悲しんでいる（私の）思いを果たせないまま去ってしまった。彼（私）の心は鳥の翼のようで、骨はひ弱いが、盛んに羽ばたいている⁶⁸⁾。
- 3- アスマーウにとっては、遠くへ旅することはたやすいことであったが、彼女への思いで分別を失った者（私）は、ひたすら恋い慕うほかはなかった。
- 4- 私にかまわないでくれ。ウナム・ハイサムよ。まことに、吝嗇は男のよい資質を盗み去るものなのだ。
- 5- 私にかまわず、私の言うことを受け入れてくれ。何故なら、私は、私の名声がますます高められることにのみ興味を持っているからだ。
- 6- 私は寛容な男であり、家族持ちである。私が気遣うのは、不幸をもたらす災難と（部族のために果たすべき）義務⁶⁹⁾である。
- 7- 夜になって、あたりが静かになり、暗闇の中、道に迷い、犬の鳴き声⁷⁰⁾を頼りに

68) 心が乱れ動く様を言ったもの。

69) huqūq（義務）とは、部族に課される血債の支払いなどをさすものであろう。

70) 砂漠で道に迷った者は、犬のような声をあげる。するとテントの飼い犬が吠え、テントの主は

- 訪ねて来る旅人を、私はしばしば招いてもてなした。それは、ちょうど、冬の星（スバル）が沈みかける頃であった。
- 8- 旅人は夜になり、あたりが暗くなり始めた頃、風が着衣をつつみ、雷光が煌めく中、寒さと争っていた。
- 9- 稲妻が、三日続きの雨を降らせた、垂れこめた雨雲の中で煌めき、地面に近い雲から豪雨を注ぐ。
- 10- 私は客をもてなしたが、冷たく遇せず、テントは狭かったが、気前よさをあらわさないようなことは言わなかった。
- 11- すなわち、私は客に、「ようこそ、ご自分の家庭に居られるようにくつろいでください。さあ、これがあなたとお連れのために用意しておいた朝の飲み物ですよ。」と言った。
- 12- 私は眠っているラクダの所へ行ったが、宮殿のような瘤をそなえた立派なラクダが屠殺をまぬがれた。
- 13- （私が屠殺するために引き離したのは）早春に子を産む予定の白い雌ラクダ⁷¹⁾で、（そのため眠っていたラクダは、屠殺を免れたのである）。この雌ラクダは妊娠10ヶ月目のラクダの前に現れると、まるで種ラクダほど巨大であった。
- 14- 私はラクダの足の腱を切り、血を流す広い裂け目をつけた。ラクダの肩の前部の胸を大きく切り裂いた。
- 15- 次いで、二人の屠殺人がラクダに手をかけ、その上に乗って、瀕死のラクダの皮をはいだ。
- 16- やがて、我々の所に解体したラクダの乳房と瘤と、今にも立とうとしているような白い子ラクダ⁷²⁾がひきずりだされた。
- 17- 腹を裂かれた雌ラクダから取り出された子ラクダの皮膜は子ラクダに傷をつけずに、刀で切り裂いて（われ等にこれを供したのは）善人らとよく付き合うやさしい男⁷³⁾だ。
- 18- 我々は整えられた料理で夜を過ごした。客には夜半まで、脂が乗った分厚い焼肉と飲み物がふるまわれた。
- 19- 客は、はなはだ寒い東風にそなえて、柔らかな掛け布と毛布⁷⁴⁾をかけてその夜を過ごした。
- 20- 貴人らは皆、客をよくもてなすことによって、非難から身を守る。よい人々の間には、善行への道がある。

火をかざして旅人を招き、食事を与えたりする。

71) 客のために所有するラクダの中で最高のラクダを選んで屠殺したことをあらわす。

72) 'azhar (白い) は子ラクダのこと。白いラクダは高価である。また、乳房とこぶと胎児は、美味な部分と言われている。

73) 'akh (兄弟) とは、ラクダをさばいた屠殺人の一人をさす。ラクダの子を無傷で取り出した心遣いをしたのは善人らとの付き合いによるものとしている。bi-'ikhā-i (兄弟付き合い) の bi- は理由を表す。

74) maṣqūl al-kisā-i については、duwāya (ミルクの薄膜) のこと、とアルアスマイーの説をあげているが、これでは意味を成さないので、dithār (毛布) 説によった。

- 21- あなたの命にかけて誓って言うが、国は住民が多くて狭いのではなく、人々の
気質が狭いのである。
- 22- ズラーラ⁷⁵⁾につながる血統が、また、ファダキーとアルアシャッドにつながる
血統が、私の名を高めている。
- 23- (祖先の) 高貴な行いは、男の家柄を高く引き上げるが、一部の親たちの行い
は貧弱である。

75) Zurāra はイスラームより100年ほど前のタミームの族長。Fadakī は詩人の母の父、al-Ashadd も
詩人の祖先の一人。

—— (XXIV) サアラバ・ブヌ・スアイル・ブヌ・フザーイー・

アルマーズィニー ——

تَعْلَبَةُ بْنُ صُعَيْرِ بْنِ خُرَاعِي الْمَازِنِيِّ

まえがき

この詩人は、『歌の書』にも『詩と詩人たち』のいずれにも取り上げられておらず、彼が生きた時代も年齢も不明である。また、彼の作とされている詩はここに取り上げるものしかない。彼の名は تَعْلَبَةُ بْنُ صُعَيْرِ بْنِ خُرَاعِي بْنِ مَازِنِ بْنِ مَالِكِ بْنِ عَمْرِو بْنِ تَمِيمٍ である。Ibn Hajar 編 *ʿIṣāba* および Ibn al-ʿAṭhīr 編 *ʿUṣd al-Ghāba* に、預言者の伝承を伝えた人物に تَعْلَبَةُ بْنُ عَمْرِو بْنِ زَيْدِ بْنِ سَلِيلٍ という人物があげられているが、こちらの祖先は、عَمْرُو بْنُ زَيْدِ بْنِ سَلِيلٍ となっていて、ウズラ族出身であり、詩人とは別人であることが分かる。

本詩11行目に「太陽が右手を、何物をも覆い隠す暗夜へと広げ始める（太陽が沈み始めたの意）」とあるが、al-ʿAṣmaʿī はこの表現に関し、「後にラビード Labīd が盗用したものであり、*Thaʿlaba* は Labīd の祖父よりも年長であった。」と述べている。（ラビードの *Muʿallqa*, 65行）ラビードは560年ごろの生まれで、90歳以上長生きしてイスラーム時代を迎えた mukhaḍrim 詩人であるが、彼の祖父より年長となると、完全にジャーヒリーヤ時代の詩人ということになる。

詩の内容からするとイスラーム的な要素は全くうかがえず、相当古い時代の詩人かもしれない。しかし、アルアンバーリーによる本詩集の校訂者 Lyall は Ibn Sikkīt による *al-Manṭiq* に「*Thaʿlaba b. Ṣuʿayr al-Māzinī* は *Thaʿlaba b. ʿAbī Ṣuʿayr* とはいわれ、預言者伝承家 *ʿAbd al-lāh b. Thaʿlaba* (A.H. 89年没) の父であった。」との記述を論拠として、「詩人はラビードと同時代か、彼より年少であったかもしれない。」と述べている。（al-ʿAnbārī 注釈テキスト p.257脚注参照）

この詩の15行の上の句は、本詩集 No. VIII で紹介した al-Ḥādira の詩16行目の上の句と同じものである。al-Ḥādira は6世紀後半の人であった。

この詩は以下のように多様なことに言及している。

- 1-5行：アムラという女性の不実をなじり、加えて、女性一般への不信感を表明。
- 6-14行：ラクダによる旅出。ラクダの俊足ぶりをダチョウのそれにたとえている。
- 15-19行：酒を用意して気前よく客を接待したこと。
- 20-21行：駿馬によって敵をはねかえした詩人の自慢話。
- 22-23行：乙女らとの戯れ。
- 24-26行：敵を論破して服従させたという自慢話。

kāmil 調、26行。

(XXIV) テキスト

قَالَ ثَعْلَبَةُ بْنُ صُعَيْرِ بْنِ خُزَاعِيٍّ الْمَازِنِيِّ

- 1- هَلْ عِنْدَ عَمْرَةَ مِنْ بَنَاتِ مُسَافِرٍ
 - 2- سِمْ الإِقَامَةَ مِنْ بَعْدِ طُولِ ثَوَائِهِ
 - 3- لِعِدَاتِ ذِي أَرْبٍ وَلَا لِمَوَاعِدِ
 - 4- وَعَدْتِكَ ثُمْتُ أَخْلَفْتُ مَوْعُودَهَا
 - 5- وَأَرَى الْقَوَائِي لَا يَدُومُ وَصَالُهَا
 - 6- وَإِذَا خَلِيلُكَ لَمْ يَدُمْ لَكَ وَصْلُهُ
 - 7- وَجَنَاءَ مُجَفَّرَةِ الضُّلُوعِ رَجِيلَةٍ
 - 8- تُضْجِي إِذَا دَقَّ الْمَطِيُّ كَأَنَّهَا
 - 9- وَكَأَنَّ عَيْبَتَهَا وَفَضَلَ فِتَانِهَا
 - 10- يَنْبِرِي لِرَائِحَةٍ يُسَاقِطُ رِيَشَهَا
 - 11- فَتَذَكَّرْتَ ثَقَلًا رَثِيدًا بَعْدَ مَا
 - 12- طَرَفْتَ مَرَاوِدَهَا وَغَرَّدَ سَقْبُهَا
 - 13- فَتَرَوَّحًا أَصْلًا بِشَدِّ مُهْذِبِ
 - 14- فَبَنَتْ عَلَيْهِ مَعَ الظَّلَامِ خِبَاءَهَا
 - 15- أَسْمِي مَا يُدْرِيكَ أَنْ رُبَّ فِتْيَةٍ
 - 16- حَسَنِي الْفُكَاهَةِ لَا تُذَمُّ لِحَامَتُهَا
 - 17- بَاكَرَتْهُمْ بِسَاءِ جَوْنٍ ذَارِعِ
 - 18- فَقَصَرَتْ يَوْمَهُمْ بِرَنَّةِ شَارِفِ
 - 19- حَتَّى تَوَلَّى يَوْمَهُمْ وَتَرَوَّحُوا
 - 20- وَمُغِيرَةَ سَوْمِ الْجَرَادِ وَزَعَتْهَا
 - 21- تَيْقِ كَجُلُودِ الْقِدَافِ وَنَثَرَةَ
 - 22- وَلَرُبَّ وَاضِحَةِ الْجَبِينِ غَرِيرَةَ
- ذِي حَاجَةٍ مُتَرَوِّحٍ أَوْ بَاكِرِ
وَقَضَى لُبَانَتَهُ فَلَيْسَ بِنَاطِرِ
خُلْفٍ وَلَوْ خَلَفْتَ بِأَسْحَمِ مَائِرِ
وَلَعَلَّ مَا مَنَعَتْكَ لَيْسَ بِضَائِرِ
أَبَدًا عَلَى عُسْرِ وَلَا لِمُيَاسِرِ
فَاقْطَعْ لُبَانَتَهُ بِحَرْفِ ضَامِرِ
وَلَقَى الْهَوَاجِرِ ذَاتِ خَلْقٍ حَادِرِ
فَدَنَّ ابْنِ حَيَّةٍ شَادَهُ بِالْأَجْرِ
فَنَنَانٍ مِنْ كَنَفِي ظَلِيمٍ نَافِرِ
مَرُّ النَّجَاءِ سِقَاطَ لَيْفِ الْآبِرِ
أَلَقْتَ ذُكَاءَ يَمِينِهَا فِي كَافِرِ
بِالْآءِ وَالْحَدَجِ الرِّوَاءِ الْحَادِرِ
نَرٌّ كَشُؤْبُوبِ الْعِشِيِّ الْمَاطِرِ
كَالْأَحْمَسِيَّةِ فِي النَّصِيفِ الْحَاسِرِ
بِيضِ الْوُجُوهِ ذَوِي نَدَى وَمَآثِرِ
سَبْطِي الْأَكْفِ وَفِي الْخُرُوبِ مَسَاعِرِ
قَبْلَ الصَّبَاحِ وَقَبْلَ لَغْوِ الطَّائِرِ
وَسَمَاعِ مُدْجِنَةٍ وَجَدَوَى جَارِرِ
لَا يَنْتُنُونَ إِلَى مَقَالِ الرَّاجِرِ
قَبْلَ الصَّبَاحِ بِشَيِّئَانِ ضَامِرِ
ثَقَفٍ وَعَرَّاصِ الْمَهْرَةِ عَاتِرِ
مِثْلِ الْمَهَاةِ تَرُوقُ عَيْنَ النَّاطِرِ

- ٢٣- قَدْ بَتُّ أَلْعِيْهَا وَأَقْصُرُ هَمَّهَا حَتَّى بَدَأَ وَضَحُ الصَّبَاحِ الْجَاشِرِ
 ٢٤- وَلَرُبُّ خَصْمٍ جَاهِدِينَ ذَوِي شِدَا تَقْذِي صُدُورُهُمْ بِهَنْرٍ هَاسِرِ
 ٢٥- لُدُّ ظَارَتْهُمْ عَلَى مَا سَاءَهُمْ وَخَسَاتُ بَاطِلِهِمْ بِحَقِّ ظَاهِرِ
 ٢٦- بِمَقَالَةٍ مِنْ حَازِمٍ ذِي مِرَّةٍ يَدَأُ الْعَدُوَّ زَيْرُهُ لِلزَّائِرِ

(XXIV) 訳

- 1- アムラの住まいには夕方や早朝出立する旅人に、道中の必要とする品を与える用意があるのだろうか。
- 2- 彼は長く留まり、用事を済ませてしまったので、さらに留まるのは憂鬱で、もはや待つことはできない。
- 3- ずる賢い（彼女の）約束や不誠実な誓約のために、（私は彼女を信用しなくなった。）たとえ（偶像の聖石に）注がれる生贄の黒い血にかけて、彼女が誓っても（もはや、信用できない）。
- 4- 彼女はあなたに約束したが、それを果たさなかった。おそらく、あなたを拒んでも、彼女はなんら痛痒を感じなかったのであろう。
- 5- 私の見るところ、天性の美女らとの親しい交わりは、苦楽いずれのときも、長くは続かないものだ。
- 6- 親しい友との交わりが保てなくなったら、友への思いを断ち切って、鍛えてきた引き締まったこのラクダに乗って旅に出るがよい。
- 7- 頑強なこの雌ラクダは、大きな肋骨を備え、歩みは力強く、体型は整い、酷暑の真昼時⁷⁶⁾でも早駆けし、堂々とした体形を備えている。
- 8- 雌ラクダは夜通し旅を続けて朝を迎えるが、他のラクダが長旅で衰弱しやせ細っているときも疲れ知らずで、まるで、焼レンガを積み上げ、漆喰を塗ったイブン・ハイヤの宮殿⁷⁷⁾のように構えている。
- 9- 雌ラクダが背に乗せている皮袋と鞍の縁は（早駆けする時には）まるで、逃げてゆく雄ダチョウの両側に突き出た両翼のようである⁷⁸⁾。
- 10- 雄ダチョウが、卵の所へ帰る雌ダチョウと並んで走るときには、疾駆のため、後者は羽を落とす。ちょうど、ナツメヤシに受粉する者が雌しべの膜質繊維をとって落とすように（羽が落ちる）⁷⁹⁾。

76) アラブは真昼の酷暑のころ、ラクダで旅するのをしばしば誇っている。ヒッリザの *Mu'allaga* 14 行にも、「不安に駆られる人々が、墓につながるラクダのように当惑しているとき、私は正午の酷暑も厭わず、ラクダに乗って気晴らしをする」とある。（『アラブ・イスラム研究』6, p.8 参照）

77) Ibn Hayya の宮殿については解説もなく、正体不明。

78) ラクダが横腹に下げている食糧袋と鞍に被せる皮製のシートの姿を、雌ダチョウが両翼を張った羽に喩えていて、同時に雌ラクダに俊足ぶりを表現している。

79) ナツメヤシには雌雄があり、樹に登って雌しべの膜質の繊維 (lif) を取り除いて、雄しべを房

- 31- ラクダの足裏は槌のように頑強で、蹄を覆う毛は不足しておらず、贅肉もついていない。
- 32- ラクダはテントの日陰に入って昼寝する。ちょうどカモシカがシドラ（樹）の根元にねぐらを求めるようだ。
- 33- （昼寝をしているラクダの姿は）まるで、洪水が運んできて水路の端に留まっている岩のようで、他の石はその背後に集積している。
- 34- 私はこのラクダを（長旅で）酷使し、骨が腐り、肉が失われ、死んでしまったかと思えるほどに疲れさせた。
- 35- 私を咎める女は、明日のこともその後のことも知らないにもかかわらず、言う。
- 36- まことに、富は永遠だ（富があれば長生きできる）、貧困は人を死なせる、と。
- 37- 私はわが祖父に誓って言おう。軟毛が風で飛ぶような太った純白のラクダ百頭とて、私に永遠の命を授けてはくれない。
- 38- たとえ、そなたが脚が白い野生のヤギすら登れない岩山の上にアルムシャッカル⁵¹⁾のような宮殿を私のために建ててくれてもだ。
- 39- （その宮殿の中にあっても）死は私を探し出す。まことに、神の判定に匹敵する判定はないのだ。
- 40- 私は、最善の生き方は敬神の念を抱くこと、最悪のそれは罪惡を犯すことと心得ているのだ、と。

51) al-mushaqqar : ササン朝ペルシャの総督がアルバハレーンに建てた城砦宮殿のこと。

— (XXII) サラーマ・ブヌ・ジャンダル・アッサアディー —

سَلَامَةُ بْنُ جَنْدَلٍ السَّعْدِيُّ

まえがき

詩集 *al-ʿAṣmaʿīyāt* No. 8にこの詩人の詩とされるものがあるが、これによると彼はラフム朝の最後の王 *al-Nuʿmān ʿAbū Qābūs* の没年 A.D. 602-607頃まで生きていたことになる。*al-ʿAṣmaʿīyāt* の校訂者 Ahlwardt は *Salāma* の詩に、*raḥmān* (慈愛厚きお方) という単語が使われている所から、彼はムスリムになったと見なしている。

『歌の書』は彼を取り上げていないが、『詩と詩人たち』では、彼を「ジャーヒーリヤ時代の古詩人 *jāhilī qadīm*」としている。すなわち、彼は、タグリブ族のムアッラカ詩人で、ラフム朝のアムル・ブヌ・ヒンド王 (A.D. 569没) の殺害者とされているアムル・ブヌ・クルスームと同時代人となっている。

彼はムカーイス *Muqāʿis* 一家に属し部族の傑出した戦士でもあった。彼の一家は第二次 *yawm al-kulāb* (A.D. 612頃) の戦いでタミーム族を率いた族長カイス・ブヌ・アースィム *Qays b. ʿĀsim* を出している。この戦いでは詩人の名は見当たらないが、*yawm jadūd* の戦いでは、カイスに従って戦闘に参加し、バクル族を敗走させている (*ʿAyyām al-ʿArab* p.178)。カイスは晩年イスラームに改宗しているので、この詩人も生きていたならば、改宗していた可能性がある。

この詩は本詩集の中では優れたものとされ、特に馬の描写がよいとされている。
basīt 調、39行。

(Lyll 校訂の *al-ʿAnbārī* の注釈書では32行となっているが、*ʿAḥmad Muḥammad Shākir* らによるカイロ版では39行となっている。これは後者が、ウィーンならびに大英博物館の写本、および1910年の *Salāma* の詩集 (ペイルート版) などを参照して追加された7行が加わっているためである。このため本訳はカイロ版によった。)

(XXII) テキスト

قَالَ سَلَامَةُ بْنُ جَنْدَلٍ السَّعْدِيُّ

- | | |
|---|--|
| أَوْدَى الشَّبَابُ حَمِيدًا ذُو التَّعَاجِبِ | أَوْدَى وَذَلِكَ شَأْوَ غَيْرِ مَطْلُوبِ |
| وَلَّى حَيْثًا وَهَذَا الشَّيْبُ يَطْلُبُهُ | لَوْ كَانَ يَدْرِكُهُ رَكْضُ الْيَعَاقِبِ |
| أَوْدَى الشَّبَابُ الَّذِي مَجَّدَ عَوَاقِبُهُ | فِيهِ نَلَذُ وَلَا لَذَاتٍ لِلشَّيْبِ |
| وَلِلشَّبَابِ إِذَا دَامَتْ بَشَاشَتُهُ | وَدُ الْقُلُوبِ مِنَ الْبَيْضِ الرَّعَائِبِ |
| إِنَّا إِذَا غَرَبَتْ شَمْسٌ أَوْ ارْتَفَعَتْ | وَفِي مَبَارِكِهَا بُزْلُ الْمَصَاعِبِ |
| قَدْ يَسْعَدُ الْجَارُ وَالضَّيْفُ الْغَرِيبُ بِنَا | وَالسَّائِلُونَ وَتُغْلِي مَيْسِرَ النَّيْبِ |

— (XXV) アルハーリス・ブヌ・ヒッリザ・アルヤシュクリー —

الْحَارِثُ بْنُ حِلْزَةَ الْيَشْكُرِيُّ

まえがき

この詩人は、*Mu'allaqā* で知られている。(『アラブ・イスラム研究』6, p.1-13参照) ラフム朝の 'Amr b. Hind 王 (AD. 554-569) と同時代の人物である。彼の詩は本詩集の No. LXII および Lyall 版 Appendix 1 の2編も取り上げられている。彼はその名の通り、バクル・ブヌ・ワーイル系のヤシュクル族の出身である。この詩は *Dhuhl b. Shaybān* 族の族長 Qays b. *Sharāḥīl* を讃えたものとされている。Qays の母は *Māriya Bint Sayyār* で、バクル系の有力部族出身とされている。ただし、この詩では讃える相手を王としていて、族長よりも上位者を意図しているようである。10行目の「マーリヤの息子 'Ibn Māriya」は、ガッサーン朝の *al-Hārith al-'A'raj* 王の母の名であるとの伝承があるのは、そのためであろう。彼女は、*Māriya Dhāt al-Qurtayn* (耳飾りのマリヤ) と呼ばれ、*Jafna* 家 'Arqam の娘と言われている。

アルハーリス王はビザンツの領土をペルシャやラフム朝の攻撃から良く守った。ラフム朝の王 *al-Mundhir b. Mā' al-Samā'* を A.D. 544年に敗北させ、A.D. 569年まで生きていた。この詩はアルハーリス王に捧げられたとする説は以上のような点から推測されているが、10行目の 'Abū Ḥassān なる人物が、この王の息子であれば決定的な説となるであろう。短い詩で、かつての恋人の住まい跡で追憶、ラクダによる旅、カイスへの賛辞をそれぞれ詠んでいる。kāmīl 調、14行。

(XXV) テキスト

قَالَ الْحَارِثُ بْنُ حِلْزَةَ الْيَشْكُرِيُّ

- | | |
|---|--|
| آيَاتُهَا كَمَهَارِقِ الْفُرْسِ | ١- لِمَنِ الدِّيَارُ عَفْوَنَ بِالْحُبْسِ |
| سُفَعِ الْخُدُودِ يَلْحَنَ كَالشَّمْسِ | ٢- لَا شَيْءَ فِيهَا غَيْرُ أَصُورَةٍ |
| رَاضِ الْجِمَادِ وَآيَةِ الدَّغْسِ | ٣- أَوْ غَيْرِ آثَارِ الْجِيَادِ بِأَعْدِ |
| كُلِّ الْأُمُورِ وَكُنْتُ ذَا حَدْسِ | ٤- فَحَبَسْتُ فِيهَا الرُّكْبَ أَحْدِسُ فِي |
| رَافِ الظَّلَالِ وَقُلْنَ فِي الْكُنْسِ | ٥- حَتَّى إِذَا التَّفَعَّ الطَّبَاءُ بِأَطْ |
| مِنْهَا وَلَا يُسْلِيكَ كَالْيَأْسِ | ٦- وَيَسْتُ مِمَّا قَدْ شُغِفْتُ بِهِ |
| تَهْصُ الْحَصَى بِمَوَاقِعِ خُنْسِ | ٧- أَنْبِي إِلَى حَرْفٍ مُذَكَّرَةٍ |
| طَاعِ الْفِرَاءِ بِصَحْصَحِ شَأْسِ | ٨- خَدِمِ نَفَائِلَهَا يَطْرُنَ كَأَفْ |

- ٩- أَفَلَا تُعَدِّيْهَا إِلَىٰ مَلِكٍ شَهْمَ الْمَقَادَةِ مَا جِدَ النَّفْسِ
 ١٠- وَإِلَىٰ ابْنِ مَارِيَةَ الْجَوَادِ وَهَلْ شَرَوْى أَبِي حَسَّانَ فِي الْإِنْسِ
 ١١- يَحْبُوكَ بِالرَّغْفِ الْقِيُوضِ عَلَىٰ هِمَّانِهَا وَالْذُّهْمِ كَالْعَرَسِ
 ١٢- وَبِالسَّيِّكِ الصَّفْرِ يُضَعِّفُهَا وَبِالْبَغَايَا الْبَيْضِ وَاللُّغْسِ
 ١٣- لَا يَرْتَجِي لِلْمَالِ يُهْلِكُهُ سَعْدُ النُّجُومِ إِلَيْهِ كَالنَّحْسِ
 ١٤- فَلَهُ هُنَاكَ لَا عَلَيْهِ إِذَا دَبَعَتْ أَنْوْفُ الْقَوْمِ لِلنَّعْسِ

(XXV) 訳

- 1- アルフブス⁸⁶⁾の消えかかった住まいは、一体誰のものか。その跡形は、まるで、文字が書かれたペルシャ人の文書のようなだ。
- 2- 住まい跡には、野生の牛の群れしかない。野牛の頬は黒く、(白い背が) 日に当たって輝いている⁸⁷⁾。
- 3- また、高台の乾いた荒地⁸⁸⁾のあたりには、駿馬らの足跡や強く踏みつけられて出来た窪みが残っている。
- 4- 追憶に耽りがちな私は、そこで友らを立ち止まらせ、過ぎ去ったすべての事に想いをはせた⁸⁹⁾。
- 5- やがてカモシカが、木陰に包まれて、樹の根元に掘った穴倉で(昼間の暑気を避けて) 午睡する時刻になった。
- 6- (かつて、ここに住んでいた) 彼女が戻ってくれないかと、私は胸を焦がしたが、願ひむなく、慰められることもなく、あきらめた⁹⁰⁾。
- 7- 私は、種ラクダのような頑強で良く引き締まった雌ラクダに乗ったが、このラクダは短いハンマーのような足裏で石ころを砕く。
- 8- ラクダの足に履かせている皮製のサンダルは、長旅を続けたために擦り切れて、その破片が硬い凸凹の地面に飛び散る。
- 9- そなたはこの雌ラクダを、(民を) 近寄りがたい剛胆さで導いている、栄光に包まれた精神の保持者である王⁹¹⁾のもとへ向けないのか。

86) al-Hubs は al-Hibs とも読まれ地名。mahraq (複数 mahāriq) は絹、または木綿の布で、膠で固め、貝で磨いて、文字を書くのに供された。パフレビー語で muhrak は貝のこと。

87) ka-sh-shams-i は fi sh-shams-i のこととの伝承によった。

88) al-Jimād は地名とされているが、高台の乾いた荒地 jumd の複数形と解した。

89) イムルウ・ル・カイスの *mu'allqa* 5行に、詩人が友らと廃墟でラクダを止めて泣く場面で、「そこで私の恋人は、ラクダを止めて、私に“死ぬほど悲しむな、気丈に耐え忍べ”と言った。」とあるのに通じる一行である。(『関西アラブ・イスラム研究』3, p. 5参照)

90) 詩人は上の句では一人称としたものを、下の句では二人称に変換している。

91) ここで「Malik (王)」というのは、詩人がこの詩で讃えている Qays b. Sharāhīl と解説されているが、まえがきで触れたように10行の内容から推してガッサーン朝の al-Ḥārith 王の可能性もある。

- 10- すなわち、マーリヤ⁹²⁾の寛大な息子のもとへ。一体、人間界にアブー・ハッサーンのような人物が他にいようか。
- 11- 王はそなたに、腰帯の上がゆったりとした鎖帷子と、ヤシの樹のように背の高い黒毛の馬を与えるであろう。
- 12- その上、黄金を与え、白人の娘や唇が深紅な奴隷娘らも相次いで授けるであろう。
- 13- 王はどれほど金品を費やしても意に介さない。彼にとっては吉兆の星も凶兆のそれも同じことである⁹³⁾。
- 14- このようであるから、王は祝福され、呪われることがない。これに反して、人々(敵)の鼻はへこみ惨めなものとなる⁹⁴⁾。

92) Māriya は Māriya bint Sayyār のことで、詩人が誉めている Qays の母とされているが、アブー・アムルは、「彼女は王家の人でその息子とは王をさす」と説いている。

93) 占星術師の言葉に左右されず、常に与えるの意。

94) 有徳な王は臣下から常に祝福され、彼の敵はいつも鼻をへし折られ没落するの意。

— (XXVI) アブダ・ブヌ・アッタビーブ —

عَبْدَةُ بْنُ الطَّيِّبِ

まえがき

この詩人は、本詩集 No. XXII 及び XXIII のまえがきで触れたタミーム族の有力な族長であった Qays b. ʿĀsim と同族で、彼に従って晩年イスラームに入信した mukhadrim 詩人である。彼は Qays に対して、Ḥamāsa (No. 263, Vol. 3: 790) 3行の哀悼詩を残している。(『歌の書』18: 163にも掲載されている)。

ここで取り上げられている詩には酒びたりの場面があり、イスラームの禁酒の掟の影響はほとんど見られない。しかし、詩の冒頭には A.H. 13年バクル族の族長 al-Muthannā に率いられたアラブ軍が、バビロンでペルシャ軍に勝ったのを祝福していると思われる文句があり、タミームがイスラームに入信したよりも数年後に詠まれたものらしい。この戦いにおいては、アラブ軍がペルシャ軍の象を殺し、al-Madāʾin の城門まで敵を追いつめたとされている。7行目に kūfat-i al-jund-i とあり、「兵士らの集結地」と訳したが、もしこれが、カリフ、ウマルが建設させた軍団居留地としてのクーファ市のことであれば、この詩は A.H. 15年 (A.D. 637年) より後に詠まれたことになる。

この詩は長く、少々散漫なところもあるが、詩の巧拙よりも詠まれている内容に注目すべき点が多々ある。刺繍した絨毯 (70-71行)、移動式給仕用テーブル (77行)、銀製の酒盃 (74行)、石造建築物 (72行) などペルシャ文化に接した影響が見受けられる。

1-8行：恋人ハウラ Khawla が彼と別れ、アルマダーイン al-Madāʾin に去ったこと。そこは、アラブとペルシャ人が戦った土地であり、そこへ行ってしまった彼女への想いを語る。

9-23行：彼女への想いを断ってラクダで長くて苦しい旅に出る。

24-44行：旅の途中でのカモシカ狩りについて語る。

45-53行：略奪行と思われる、馬を連れたラクダによる危険な旅。

54-56行：狩猟についての語り。

57-81行：放埒な酒盛りなど。

basīṭ 調、81行。なお、本詩集 No. XXVII にもこの詩人の作品が登場する。

(XXVI) テキスト

قَالَ عَبْدَةُ بْنُ الطَّيِّبِ

١- هَلْ حَبْلُ خَوْلَةَ بَعْدَ الْهَجْرِ مَوْصُولُ أَمْ أَنْتَ عَنْهَا بَعِيدُ الدَّارِ مَشْغُولُ

- ٢- حَلَّتْ خُوَيْلَةُ فِي دَارٍ مُجَاوِرَةٍ
- ٣- يُقَارِعُونَ رُؤُوسَ الْعُجَمِ ضَاحِيَةً
- ٤- فَخَامَرَ الْقَلْبَ مِنْ تَرْجِيحِ ذِكْرِهَا
- ٥- رَسَّ كَرَسٌ أُخِي الْحُمَى إِذَا غَبَرَتْ
- ٦- وَلِلْأَحَبَّةِ أَيَّامٌ تَذْكُرُهَا
- ٧- إِنَّ اللَّهِي ضَرَبَتْ بَيْتًا مُهَاجِرَةً
- ٨- فَعَدَّ عَنْهَا وَلَا تَشْغَلْكَ عَنْ عَمَلٍ
- ٩- بِجَسْرَةٍ كَعَلَاةِ الْقَيْنِ دَوْسَرَةٍ
- ١٠- عَنَسِي تُشِيرُ بِقِنَوَانٍ إِذَا زُجِرَتْ
- ١١- قَرَوَاءَ مَقْدُوفَةٍ بِالتَّخَضُّ يَشْعَفُهَا
- ١٢- وَمَا يَزَالُ لَهَا شَأْوٌ يُوقِّرُهُ
- ١٣- إِذَا تَجَاهَدَ سَيْرُ الْقَوْمِ فِي شَرِكٍ
- ١٤- نَهَجٍ تَرَى حَوْلَهُ بَيَضَ الْقَطَا قُبَصًا
- ١٥- حَوَاجِلُ مُلِئَتْ زَيْتًا مُجَرَّدَةً
- ١٦- وَقَلَّ مَا فِي أَسَاقِي الْقَوْمِ فَانْجَرَدُوا
- ١٧- وَالْعَيْسُ تَذَلُّكَ ذَلْكَ عَنْ ذَخَائِرِهَا
- ١٨- وَمُزَجِيَّاتٍ بِأَكْوَارٍ مُحَمَّلَةٍ
- ١٩- تَهْدِي الرِّكَابَ سَلُوفٌ غَيْرُ غَافِلَةٍ
- ٢٠- رَعَشَاءُ تَنْهَضُ بِالذَّفَرِ مُوَكِبَةً
- ٢١- غَيْهَمَةٌ يَنْتَحِي فِي الْأَرْضِ مَنْسِمُهَا
- ٢٢- تَخْدِي بِهِ قُدْمًا طَوْرًا وَتَرْجِعُهُ
- ٢٣- تَرَى الْحَصَى مُشْفَتِرًا عَنْ مَنَاسِمِهَا
- ٢٤- كَأَنَّهَا يَوْمَ وَرْدِ الْقَوْمِ خَامِسَةً
- ٢٥- مُحْتَابٌ بَصِيعٌ جَدِيدٌ فَوْقَ نُقْبَتِهِ
- ٢٦- مُسْفَعُ الْوَجْهِ فِي أَرْسَاعِهِ خَدَمٌ
- أَهْلَ الْمَدَائِنِ فِيهَا الدِّيكُ وَالْفِيلُ
- مِنْهُمْ فَوَارِسُ لَا عُزْلٌ وَلَا مِيلُ
- رَسٌّ لَطِيفٌ وَرَهْنٌ مِنْكَ مَكْبُولُ
- يَوْمًا تَأْوَبُهُ مِنْهَا عَقَائِلُ
- وَلِلنَّوَى قَبْلَ يَوْمِ النَّيْنِ تَأْوِيلُ
- بِكُوفَةِ الْجُنْدِ غَالَتْ وَدَهَا غُولُ
- إِنَّ الصَّبَابَةَ بَعْدَ الشَّيْبِ تَضْلِيلُ
- فِيهَا عَلَى الْأَيْنِ إِرْقَالٌ وَتَبْغِيلُ
- مِنْ خَصْبَةٍ بَقِيَتْ فِيهَا شَمَائِلُ
- فَرَطُ الْمِرَاحِ إِذَا كَلَّ الْمَرَّاسِيلُ
- مُحَرَّفٌ مِنْ شُيُورِ الْعَرْفِ مَجْدُولُ
- كَأَنَّهُ شَطَبٌ بِالسَّرْوِ مَرْمُولُ
- كَأَنَّهُ بِالْأَفَاحِيصِ الْحَوَاجِيلُ
- لَيْسَتْ عَلَيْهِنَّ مِنْ خُوصٍ سَوَاجِيلُ
- وَفِي الْأَدَاوَى بَقِيَّاتٌ صَلَاصِيلُ
- يُنَحْرَنَ مِنْ بَيْنِ مَحْجُونٍ وَمَرْكُولٍ
- شَوَارُهُنَّ خِلَالَ الْقَوْمِ مَحْمُولُ
- إِذَا تَوَقَّدَتِ الْجِرَانُ وَالْمِيلُ
- فِي مِرْفَقَيْهَا عَنِ الدَّقْنِ تَفْتِيلُ
- كَمَا انْتَحَى فِي أَدِيمِ الصَّرْفِ إِزْمِيلُ
- فَحَدُّهُ مِنْ وَلَافِ الْقَبْضِ مَفْلُولُ
- كَمَا تُجْلِجُلُ بِالْوَعْلِ الْغَرَائِيلُ
- مُسَافِرٌ أَشْعَبُ الرُّوقَيْنِ مَكْحُولُ
- وَلِلْقَوَائِمِ مِنْ خَالٍ سَرَائِيلُ
- وَفَوْقَ ذَاكَ إِلَى الْكَعْبَيْنِ تَحْجِيلُ

- ٢٧- بَاكَرَهُ قَانِصٌ يَسْعَى بِأَكْلِهِ
 ٢٨- يَأْوِي إِلَى سَلْفِ شَعَاءٍ عَارِيَةٍ
 ٢٩- يُشْلِي ضَوَارِي أَشْبَاهَا مُجَوَّعَةً
 ٣٠- يَتَبَعْنَ أَشْعَثَ كَالسَّرْحَانِ مُنْصَلِتًا
 ٣١- فَضَمَّهِنَّ قَلِيلًا ثُمَّ هَاجَ بِهَا
 ٣٢- فَاسْتَبَتَ الرُّوعُ فِي إِنْسَانٍ صَادِقَةٍ
 ٣٣- فَانْصَاعَ وَانْصَعْنَ يَهْفُو كُلُّهَا سَدِكُ
 ٣٤- فَاهْتَرَّ يَنْفُضُ مَدْرِيَيْنِ قَدْ عَثَقَا
 ٣٥- شَرَوْى شَيْهَيْنِ مَكْرُوبًا كُغُوبُهُمَا
 ٣٦- كِلَاهُمَا يَبْتَغِي نَهْكَ الْقِتَالِ بِهِ
 ٣٧- يُخَالِسُ الطَّعْنَ إِشَاعًا عَلَى دَهَشٍ
 ٣٨- حَتَّى إِذَا مَضَّ طَعْنًا فِي جَوَاشِيهَا
 ٣٩- وَلَّى وَصَرَّعَنَ فِي حَيْثُ التَّبَسُّنَ بِهِ
 ٤٠- كَانَهُ بَعْدَ مَا جَدَّ النَّجَاءُ بِهِ
 ٤١- مُسْتَقْبِلَ الرِّيحِ يَهْفُو وَهُوَ مُبْتَرِكُ
 ٤٢- يَخْفِي التُّرَابَ بِأُظْلَافٍ ثَمَانِيَةٍ
 ٤٣- مُرَدَّفَاتٍ عَلَى أَطْرَافِهَا زَمْعُ
 ٤٤- لَهُ جَنَابَانِ مِنْ نَفْعٍ يُثَوِّرُهُ
 ٤٥- وَمَنْهَلٍ آجِنٍ فِي جَمِّهِ بَعَرُ
 ٤٦- كَانَهُ فِي دِلَاءِ الْقَوْمِ إِذْ نَهَزُوا
 ٤٧- أَوْرَدَتْهُ الْقَوْمَ قَدْ رَانَ النَّعَاسُ بِهِمْ
 ٤٨- حَدَّ الظُّهَيْرَةِ حَتَّى تَرَحَّلُوا أَصْلًا
 ٤٩- لَمَّا وَرَدْنَا رَفَعْنَا ظِلَّ أَرْدِيَةٍ
 ٥٠- وَرَدًا وَأَشْقَرَ لَمْ يُنْهِنُهُ طَابِخُهُ
 ٥١- ثُمَّتَ قُمْنَا إِلَى جُرْدٍ مُسَوِّمَةٍ
- كَانََّهُ مِنْ صَلَاءِ الشَّمْسِ مَمْلُوءُ
 فِي حَجَرِهَا تَوَلَّتْ كَالْقُرْدِ مَهْزُوءُ
 فَلَيْسَ مِنْهَا إِذَا أُمَكْنَ تَهْلِيلُ
 لَهُ عَلَيْهِنَّ قَيْدَ الرُّمَحِ تَمْهِيلُ
 سُفَعُ بِأَذَانِهَا شَيْنٌ وَتَنْكِيلُ
 لَمْ تَجْرِ مِنْ رَمَدٍ فِيهَا الْمَلَامِيلُ
 كَانَهُنَّ مِنَ الضُّمْرِ الْمَرَاجِيلُ
 مُخَاوِضُ غَمَرَاتِ الْمَوْتِ مَحْذُولُ
 فِي الْجَنْبَتَيْنِ وَفِي الْأَطْرَافِ تَأْسِيلُ
 إِنَّ السَّلَاحَ غَدَاةَ الرُّوعِ مَحْمُولُ
 بِسَلْهَبٍ سِنْخُهُ فِي الشَّانِ مَمْطُولُ
 وَرَوْقُهُ مِنْ دَمِ الْأَجْوَافِ مَعْلُولُ
 مُضَرَّجَاتُ بِأَجْرَاحٍ وَمَقْتُولُ
 سَيْفٌ جَلَا مَتْنُهُ الْأَصْنَاعُ مَسْلُولُ
 لِسَانُهُ عَنْ شِمَالِ الشُّدْقِ مَعْدُولُ
 فِي أَرْبَعِ مَسْهُنٍ الْأَرْضَ تَحْلِيلُ
 كَانَهَا بِالْعُجَايَاتِ الثَّالِيلُ
 فَفَرَجُهُ مِنْ حَصَى الْمَعَزَاءِ مَكْلُولُ
 مِمَّا تَسُوقُ إِلَيْهِ الرِّيحُ مَجْلُولُ
 حَمٌّ عَلَى وَدَكٍ فِي الْقَدْرِ مَحْمُولُ
 فَقُلْتُ إِذْ نَهَلُوا مِنْ جَمِّهِ قِيلُوا
 إِنَّ السَّقَاءَ لَهُ رَمٌّ وَتَبْلِيلُ
 وَفَارَ بِاللَّحْمِ لِلْقَوْمِ الْمَرَاجِيلُ
 مَا غَيْرَ الْعُلْيِ مِنْهُ فَهُوَ مَأْكُولُ
 أَعْرَافُهُنَّ لِأَيْدِينَا مَنَادِيلُ

- ٥٢- ثُمَّ ارْتَحَلْنَا عَلَى عِيسٍ مُخَدَّمَةٍ
 ٥٣- يَدْلَحْنُ بِالْمَاءِ فِي وَفْرِ مُخَرَّبَةٍ
 ٥٤- نَرْجُو فَوَاضِلَ رَبِّ سَيِّئُهُ حَسَنٌ
 ٥٥- رَبِّ حَبَانَا بِأَمْوَالٍ مُخَوَّلَةٍ
 ٥٦- وَالْمَرْءُ سَاعٍ لِأَمْرِ لَيْسَ يُدْرِكُهُ
 ٥٧- وَعَازِبٍ جَادُهُ الْوَسْمِيُّ فِي صَفَرٍ
 ٥٨- وَلَمْ تَسْمَعْ بِهِ صَوْتًا فَيُفْزِعَهَا
 ٥٩- كَانَ أَطْفَالُ خَيْطَانِ النَّعَامِ بِهِ
 ٦٠- أَفْرَعَتْ مِنْهُ وَخُوشًا وَهِيَ سَاكِنَةٌ
 ٦١- بِسَاهِمِ الْوَجْهِ كَالسَّرْحَانِ مُنْصَلِتٍ
 ٦٢- حَاطِي الطَّرِيقَةِ غُرَيَّانِ قَوَائِمُهُ
 ٦٣- كَانَ قُرْحَتُهُ إِذْ قَامَ مُعْتَدِلًا
 ٦٤- إِذَا أُبْسَ بِهِ فِي الْأَلْفِ بَرَزَهُ
 ٦٥- يَغْلُو بِهِنَّ وَيَنْثِي وَهُوَ مُقْتَدِرٌ
 ٦٦- وَقَدْ غَدَوْتُ وَقَرْنُ الشَّمْسِ مُنْفَتِقٌ
 ٦٧- إِذْ أَشْرَفَ الدَّيْكَ يَدْعُو بَعْضُ أُسْرَتِهِ
 ٦٨- إِلَى التَّجَارِ فَأَعْدَانِي بِلَذَّتِهِ
 ٦٩- خَرَقَ يَجِدُّ إِذَا مَا الْأَمْرُ جَدَّ بِهِ
 ٧٠- حَتَّى اتَّكَأْنَا عَلَى فُرْشٍ يُزَيِّنُهَا
 ٧١- فِيهَا الدَّجَاجُ وَفِيهَا الْأُسْدُ مُخْدِرَةٌ
 ٧٢- فِي كَعْبَةٍ شَادَهَا بَانٍ وَزَيَّنَهَا
 ٧٣- لَنَا أَصِيصٌ كَجِذْمِ الْحَوْضِ هَدْمُهُ
 ٧٤- وَالْكُوبُ أَزْهَرُ مَعْصُوبٍ بِقُلَّتِهِ
 ٧٥- مُبَرَّدٌ بِمَزَاجِ الْمَاءِ بَيْنَهُمَا
 ٧٦- وَالْكُوبُ مَلَأَنُ طَافٍ فَوْقَهُ زَبَدٌ
- يُزْجِي رَوَاكِعَهَا مَرْنٌ وَتَنْعِيلُ
 مِنْهَا حَقَائِبُ رُكْبَانٍ وَمَعْدُولُ
 وَكُلُّ خَيْرٍ لَدَيْهِ فَهُوَ مَقْبُولُ
 وَكُلُّ شَيْءٍ حَبَاهُ اللَّهُ تَخْوِيلُ
 وَالْعَيْشُ شَحٌّ وَإِشْفَاقٌ وَتَأْمِيلُ
 تَسْرِي الذَّهَابِ عَلَيْهِ فَهُوَ مَوْبُولُ
 أَوَابِدُ الرُّبْدِ وَالْعَيْنُ الْمَطَافِيلُ
 بِهِمْ مُخَالِطَةُ الْحَفَّانِ وَالْحَوْلُ
 كَأَنَّهَا نَعَمٌ فِي الصُّبْحِ مَشْلُولُ
 طَرَفٍ تَكَامَلَ فِيهِ الْحُسْنُ وَالطُّولُ
 قَدْ شَفَّهُ مِنْ رُكُوبِ الْبَرْدِ تَذْيِيلُ
 شَيْبٌ يُلَوِّحُ بِالْحِنَاءِ مَغْسُولُ
 عُوجٌ مُرْكَبَةٌ فِيهَا بَرَاطِيلُ
 فِي كَفْتَيْهِ إِذَا اسْتَرْغَبَنَ تَعْجِيلُ
 وَدُونَهُ مِنْ سَوَادِ اللَّيْلِ تَجْلِيلُ
 لَدَى الصَّبَاحِ وَهُمْ قَوْمٌ مَعَارِيلُ
 رِخْوُ الْإِزَارِ كَصَدْرِ السَّيْفِ مَشْمُولُ
 مُخَالِطُ اللَّهْوِ وَاللَّدَاتِ ضَلِيلُ
 مِنْ جَيْدِ الرَّقْمِ أَرْوَاجُ تَهَاوِيلُ
 مِنْ كُلِّ شَيْءٍ يُرَى فِيهَا تَمَائِيلُ
 فِيهَا ذُبَالٌ يُضِيءُ اللَّيْلَ مَفْتُولُ
 وَطءُ الْعِرَاكِ لَدَيْهِ الرِّقُّ مَغْلُولُ
 فَوْقَ السَّيَاحِ مِنَ الرِّيحَانِ إِكْلِيلُ
 حُبٌّ كَجَوْرِ حِمَارِ الْوَحْشِ مَبْزُولُ
 وَطَائِفُ الْكَيْشِ فِي السَّقُودِ مَخْلُولُ

- ٧٧- يَسْعَى بِهِ مِنْصَفٌ عَجَلَانُ مُنْتَطِقٌ فَوْقَ الْخَوَانِ وَفِي الصَّاعِ التَّوَابِلُ
 ٧٨- ثُمَّ اضْطَبَحْتُ كَمِيًّا قَرَقًا أَنْفًا مِنْ طَيِّبِ الرَّاحِ وَاللَّدَاتِ تَعْلِيلُ
 ٧٩- صَرْفًا مِرَاجًا وَأَحْيَانًا يُعَلِّلُنَا شِعْرَ كُمُذَهَبِ السَّمَانِ مَحْمُولُ
 ٨٠- تُذَرِّي حَوَاشِيَهُ جَيْدَاءُ آتِسَةٌ فِي صَوْنِهَا لِسَمَاعِ الشَّرْبِ تَرْتِيلُ
 ٨١- تَغْدُو عَلَيْنَا تُلْهِيْنَا وَنُصْفِدُهَا تُلْقَى الْبُرُودُ عَلَيْهَا وَالسَّرَايِلُ

(XXVI) 訳

- 1- ハウラが移住してしまった後も、彼女への愛情の絆はつながっているのか。それとも、住まう所が遥かに離れたので、お前は彼女のことを忘れたのか。
- 2- フワイラ⁹⁵⁾は、今や、アルマダーイン⁹⁶⁾の住民のそばに住んでいるが、この町には雄鶏⁹⁷⁾や象がいる。
- 3- 彼ら（アラブ軍）はペルシャ人の頭たちと郊外で戦った。彼らの中には素手ではなく（武装し）騎馬を苦にしない優れた騎士たちがいた⁹⁸⁾。
- 4- 彼女への思い出が繰り返し蘇る中で、彼女へのやるせない想いと、彼女に捉われている感情がお前の心の中に混入した。
- 5- 彼女への密かな想いは、熱に冒された者の微熱のように、昼間消えたかと思うと、夜再び繰り返す。
- 6- お前は愛する者たちと過ごした日々を思い出す。遠くへ移り住む時には、離別の日の前にこれを仄めかす予兆があるものだ。
- 7- （砂漠を去って、）兵士らの集結地⁹⁹⁾にテントを張って住まいとした彼女は、分別を失い¹⁰⁰⁾、（お前への）愛情を消滅させてしまった。
- 8- よって、彼女のことは忘れてしまえ。彼女に仕事の邪魔をさせるな。白髪混じり

95) *Khuwayla* は *Khawla* の縮小形。

96) *al-Madā'in* (*madīna* の複数形) はバグダードの南25マイルのチグリス川河畔にあったペルシャ帝国の都。古代に、*Ctesiphon* とか *Seleucia* と呼ばれた町とその周辺。ペルシャ人がアラブとの戦いで象を使ったことは良く知られている。

97) 「雄鶏」がいるとは、定住民の中に住んだことを示している。

98) カーディスィーヤ *al-Qādisīya* の戦いの後、*Sa'd b. 'Abī Waqqās* が率いるムスリム軍は、アルマダーインを A.H. 15 (A.D. 637年) に征服し、略奪をした。アルアンバーリーは、この文句はこの事件のこととしている。しかし、まえがきで触れたように、これより前のアルムサンナー *al-Muthannā* による、バビロンでのペルシャ軍との戦いとその勝利 (A.H. 13年) のことかもしれない。この戦いでは、アルムサンナーが象を殺したことになる。なお、カイロ版では、ペルシャ軍がカーディスィーヤの決戦で象を何回も連れ出した年のこととしている。

99) *kūfat-i al-jund-i* を「軍団集結地」とするか、「クーファ市 *al-kūfa*」ととるかによってこの詩の製作年代が推定される。なお、クーファはバスの後年に建設されたとする説が有力。

100) *ghūl* : ここでは理性を失う、忘却の意。

の男にとって、女性に情熱を傾けるのは過ちである。

- 9- 金床のように頑強で大胆な大型の雌ラクダに乗って（彼女のことは忘れ）旅に出るがよい。このラクダは疲れていても緩急自在に進む。
- 10- 強い雌ラクダで、駆り立てられると、まだ小さな実が残っているナツメヤシの房状花序のような尻尾を上げて応える。
- 11- このラクダは背は高く筋肉が盛り上がり¹⁰¹⁾、軽快に歩む他のラクダどもが疲れる時でも、きわめて活発に行動する。
- 12- 疾駆してやまないこの雌ラクダを止めるのは、皮をガルフ¹⁰²⁾で染め、固く編んだ手綱である。
- 13- アルヤマンの高地¹⁰³⁾の、ナツメヤシの枝で織られた敷物の筋目のように、はっきり見える道を人々が懸命に進むとき¹⁰⁴⁾、
- 14- 平坦な道の周りに、君は、砂ライチョウの卵が一つまみずつ産み付けられているのを見るだろう。それは、まるで、小さなガラス瓶が砂ライチョウ¹⁰⁵⁾のねぐらに置かれているようだ。
- 15- これらの瓶には油がいっぱい入っているが、むき出しで、椰子の葉で編まれた覆いがかけられていない。
- 16- 人々の水袋¹⁰⁶⁾には水が少ししか残っておらず、彼らは道を急いだ。各自の小さな水袋にも、雫ほどの水しか残っていなかった。
- 17- 赤みを帯びた白ラクダ¹⁰⁷⁾は持てる力を振り絞って、時には棒で、また、時にはかかとで打たれながら、旅をせかされた。
- 18- 多くの疲れ切ったラクダは、他のラクダに荷物を積み替えて、ゆっくり引かれていく。それらが背負う家財も他の人々に分けて¹⁰⁸⁾運ばれる。
- 19- ごつごつした高地も、視界の及ぶ限りの砂漠も、昼間の灼熱で燃える中、道に注意を怠らない雌ラクダがラクダ隊を先導して進んでいく¹⁰⁹⁾。

101) *maqdhūfat-in bi-n-naḥḍ-i*（体中に肉が投げかけられ）とは、厳しい鍛錬や長旅の後、ラクダの筋肉が固く盛り上がり目立つさまを言ったもの。

102) *gharf*：砂漠に生える樹木の一つで弓を作る材料に供される。その葉は皮の染料に用いられる。（Lane: *gharf* の項に詳しい説明がある）

103) *sarw*（糸杉）：ここではアルヤマンの高地のこと。

104) 13行のこの句は19行につながる。

105) *qaṭā*（砂漠のライチョウ、ヤマウズラ）は、水を求めて夜通し飛ぶと言われるが、途中疲れると、砂を掘って休み、そこに玉子を産むこともある。詩人は、この鳥よりも苦しい長旅をしていることを仄めかしている。

106) *ʿasāqin*（単数 *siqāʾ*）は集団用の大型水袋。*ʿadāwā*（単数 *ʿidāwa*）は個人用の小型の水袋。

107) *ʿīṣ*（単数 *ʿāyas*）は赤みを帯びた白ラクダで、高級高価なものとなされていた。

108) *khilāla* が *bayna* の意味で用いられている。

109) 19行は13行を受けている。

- 20- 活発なために体を震わせながら歩む俊足な雌ラクダは、頭を高く上げ、両肘は腋下から離れている¹¹⁰⁾。
- 21- 強力な雌ラクダが地面に下ろす足裏は、ちょうど、シルフ¹¹¹⁾で染めた皮を切り込む（靴職人）の鑿のようである。
- 22- 雌ラクダは、足を大きく前に出して進むこともあれば、後に引くこともある。蹄の先端には、繰り返して地面を踏みつけるために刻み目がついている。
- 23- 君は、雌ラクダの蹄が飛び散らす石を見るだろう。それはあたかも、篩が穀穀を飛び散らかすかのようなようである。
- 24- 雌ラクダは、人々が（水を絶ってから）五日目に水辺にやってきた日の、角を左右に分けた、目の周りが黒い野牛のようである¹¹²⁾。
- 25- 雄牛は白い体に白い着物を着ており、四肢には黒や赤の縞模様の長ズボンをはいている。
- 26- 顔は赤みがかった黒色で、足首は白く、足首の上の踝までには、黒い輪がはめられている。
- 27- 早朝、野牛を追って獵師が犬を連れてやって来た。彼は太陽の熱気に当たり、茶色に日焼けしていた。
- 28- 彼が帰る住まいには、口汚い、髪を振乱した、裸の女房がいて、胸元にはサルのような、痩せ衰えたロバの子、即ち、彼女の子を抱えている。
- 29- 彼は互いに似通った空腹の、よく鍛えた犬どもに、それぞれの名で呼びかける。獲物を捕らえるようにけしかけられると、どの犬も怯むようなことはない。
- 30- 獵犬は、オオカミのように頭髪を乱して、先を行く獵師の後についていた。獵師は犬より槍の長さほど前を進んだ。
- 31- 獵師は短時間獵犬を集めた後、野牛に向けて殺到させる。それらは黒犬どもで、耳には爪で引っ搔いた傷や切れ込みが見られた¹¹³⁾。
- 32- 野牛は、（これに気付くと）、眼科用の針で埃を取り除くまでもない、澄んでいて、見損じない瞳に恐怖を宿した。

110) 両肘が腋下から離れていないと、*nākit*, *hāzz*, *dāghit* などと呼ばれる傷がつく。タラファの *mu'allāqa* 21には、頑強な水運び人について、「両肘は広く張っていて」とある。『関西アラブ・イスラム研究』4, p.12参照

111) *ṣirf*: 皮を赤く染める染料。本詩集 No. III, 5行を参照。

112) 白カモシカを *ṭhawr* (雄牛) としているようだ。他の雄に負け雌から離れて一人旅をするので、*musāfir* (旅人) と擬人的な表現をしたのだろう。目の周りは黒い環で囲まれ、顔にも黒い部分がある。*baqar al-wahsh* (野生の牝牛) は大型のレイヨウ即ち、オリックスのことで、これには平原オリックスと山岳オリックスの二種がある。前者は背が白く、後者は背が黒く、腹が白く首が長い。両者とも前脚に黒い毛環が生えている。(本詩集 No. XXI, 8行訳注参照)

113) 獵犬は疾走する際、頭を地面近くに下げるので、爪で耳に傷をつけることがある。

- 33- 獵師が（野牛に向かって）駆け出すと、すべての獵犬もこれに倣い、一団となって飛ぶように走った。犬の体は細く、疾駆するさまは、まるで、投げ槍が飛んでいるようだ¹¹⁴⁾。
- 34- 野牛は身を震わせて、年を重ね固くなった二本の角を前に下げ、助けのないまま、死の淵に入るように身構えた。
- 35- 二本の角は、似通った二本の槍のようなもので、つなぎ目は固く縊り合わされ、それらの側面と先端は長くて、鋭く尖っている。
- 36- 野牛は、戦いに臨み、二本の角を使いたいと望んでいる。まことに、恐怖を覚える朝には武器を携えるべきである。
- 37- 野牛は、頭蓋骨から伸びた長い角で、驚くべき軽快さで、犬のすきを見計らって、突きを入れて殺傷するのである。
- 38- 野牛が獵犬の胸に焼け付くような突きを入れて、傷つけたとき、角は犬の内臓から出る血を繰り返し飲まされた。
- 39- 野牛は向きを変えて逃げ去り、獵犬は野牛と混戦したところに、傷つき、血に染まり、倒されていたが、一匹だけは殺されていた。
- 40- 全速力で去っていく野牛は、技にすぐれた職人が刀身を磨き上げた抜き身の剣のようであった。
- 41- 野牛は風に向かって全力を上げて飛ぶように駆けるが、（疲労のため）口の左端に舌を垂らしていた。
- 42- 野牛は（疾駆する時）四本の足の八個の蹄で土埃をかき上げる。足は地面にわずかに触れるだけである¹¹⁵⁾。
- 43- 野牛の足の蹄爪の背面には瘤状の突起があるが、それは足の筋肉の背に生えたいぼのようである。
- 44- 野牛は両側面に土埃を立て、足の間には地面から蹴り上げられた小石が多く飛び散っている¹¹⁶⁾。
- 45- なんと多くの水場が放置され、悪臭を放つことよ。その多くには、風が運んできたラクダの糞で汚されている。

114) 犬の疾走する姿は投げ槍に、馬のそれは、長槍によく喩えられる。本詩集 No. VII, 6行では、「それは毛が短い馬で、首は真っ直ぐな槍のようである」とある。『アラブ・イスラム研究』8, p. 13参照)

115) *tahlil* : 正式な誓いの言葉ではなく、簡単な言葉で誓うこと。たとえば、*wa-l-lāh-i* のような言葉。そこから、「わずかな」「微かに」などの意味となる。しかし、44行には、雲のような土埃云々とあり、少々矛盾している。

116) アルアンバーリーは *makiūl* を「王冠のよう」と説明しているが、四肢の間に小石が飛び散ったさまを表しているように思える。

- 46- その糞は、人々がバケツで汲みあげた水の中に、まるで、羊のお尻の脂身が土鍋の中に溶かされた残りかすが浮かんでいるかのようであった。
- 47- 私は人々をその水場に導いた。皆が長旅で睡魔に襲われていたので、一同が十分水を飲んだのを見計らって、「午睡をしたまえ」
- 48- 「真昼の酷暑を避けて眠り、夕方、出発しよう。皮袋は修理して、水をいっぱい入れておけ。」と私は告げた。
- 49- 我々はその水場に来ると（支柱を立てて）外布をかぶせて日陰を作った。そして、一同のための肉料理鍋が火にかけられていた。
- 50- 肉には、よく煮えて濃紅色になったものや、生煮えの赤みがかったものが混ざっていて、料理人がまだよく煮ていなかったのだが、湯が沸騰して肉の色が変わるか変わらぬうちに、すべて食いつくされてしまった。
- 51- ついで、我々は、焼き印がつけられた短毛の馬¹¹⁷⁾のそばに寄ったが、そのたてがみは（食後、油で汚れた）手を拭くタオル代わりとなった。
- 52- やがて、我々はサンダル¹¹⁸⁾の皮ひもで足首を縛られた白ラクダに乗って旅立った。（素足のために）蹄を痛めて跪いているラクダには脂を塗ってやり履物を履かせた後、ゆっくり歩ませた。
- 53- ラクダらは取っ手のついた大きな水袋を背負い、ゆっくり進む。一部の荷物は乗り手の背後に置き他の荷物はラクダの背の左右に二つずつ、垂らして乗せている。
- 54- 我々は、主の恩恵を望む。主の贈り物は立派である。すべての良き物は主の御許にあり、人々に授けられる。
- 55- 主はわれ等の持ち物となる財産を与えたまう。神が与えたものは、人々に与えねばならぬ。
- 56- 人は決して届かぬ目標を目指して努めるものだ。人生は食欲で何も与えず、不安に満ちているが同時に、希望を持たせる。
- 57- なんと多くの遠隔地の草原が、サファル月¹¹⁸⁾の豊かな雨に恵まれていることか。すなわち、その草原は、夜間に大粒の雨に見舞われたのである。
- 58- 灰色の野生のダチョウや、目の大きな子連れの野牛は、（人が訪れない）この草原においては物音を聞くことはない。聞けば恐れるであろうが。
- 59- 草原のダチョウの子らは、羊の子らのように活発である。ダチョウの子らには、まだ卵を産んでいない雌ダチョウが混ざっていた。

117) ラクダの旅に馬を連れているというのは、略奪を計画していることを仄めかしたのか。

118) サファル月 safar は、かつては12-1月の寒い季節に置かれていたが、ヒジュラ歴で閏月が廃止

- 60- 私は草原で静かに草を食べていた野獣を脅した。野獣どもは、略奪戦が行われる早朝、追いたてられるラクダのようであった。
- 61- 私は顔の引き締まったオオカミのような純潔馬に乗って脅したのであるが、それは、美しさと背丈の高さとともに完全な馬であった。
- 62- 馬の背筋には肉が盛り上がり、四肢の筋肉はあらわで、朝夕の涼しい間の乗馬で鍛えられ、贅肉はとれ、引き締まっていた。
- 63- 馬の額の白い星は、すくくと立ち上がると、まるで、ヘンナ¹¹⁹⁾で染めた後、洗った白髪のようなだ。
- 64- 騎手が千頭の馬の中にいるその馬の名を呼ぶと、筋張った四肢と石のような固い蹄を備えた（その馬は、進み出て、騎手を）彼らの先頭に立たせる。
- 65- 馬は、四肢をいっぱい広げ、ついで、内側に曲げるのが得意である。すなわち、早駆けする時には四肢を曲げると、急ぎ、一塊りにして引き戻すことができるのである。
- 66- 私は、朝日の光が突如姿を現す頃、下界はまだ闇に覆われているが、（酒屋に）出かけるのを慣わしとしていた。
- 67- 夜明けに、雄鶏が一族に向かって声を上げる頃、もっとも鶏どもは武器を持たないものどもだが ……。
- 68- 早朝、酒屋に出かけると、酒屋は私に楽しみのぶどう酒を振舞ってくれた。彼は、腰巻を床に引きずる（気楽なときも）、刀の切っ先のように（腰巻をしめた真剣な時も）、常に、北風のように気前が良い。
- 69- 彼は、重大事には真剣に取り組むが、享楽や酒色を楽しむ気前の良い男で、人の非難など気にしない。
- 70- ついに、私たちは絨毯¹²⁰⁾にもたれ掛かった。それは見事な刺繍がほどこされた錦織で飾られていた。
- 71- すなわち、鳥や藪の巣に潜むライオン、その他、あらゆる者の姿が刺繍されていた。
- 72- 大工が高く立ち上げ、飾りをつけた四角な家の中には、撚り合された灯心付きの灯火が置かれ、夜を照らしていた。
- 73- われ等のそばには、先細りの栓が壊された壺がある。ちょうど、首に皮袋を取

された後は季節が移動するようになった。（本詩集 No. XIX, 79行訳注参照）

119) ḥinnāʾ のことは、イムルウ・ル・カイスの *muʿallaqa* 63行に「群れを先導する野牛の血が馬の首を染めているが、あたかも、それは白髪の巻き毛を赤く染めたヘンナの汁のようだ。」とある。（『関西アラブ・イスラム研究』3, p. 8参照）

120) ペルシャ絨毯のことと思われる。fursh（単数 firāsh）と ʿazwāj（単数 zawj）の二枚の絨毯が重ねて敷かれているのか、後者は前者の多彩な刺繍を述べているものか検討の余地がある。

り付けられたラクダが水を求めて争い、踏みつけて壊した残骸のような壺である。

74- (ぶどう酒が入っている) 水差し¹²¹⁾は純白(銀製)で、その上部は土で栓をされ、メボウキの王冠がついていた。

75- (ぶどう酒は) 水と混ぜて冷やされている。壺と水差しの間には、大きな井ぶりが置かれているが、それは、穴が穿たれた野生のロバの腹のようである¹²²⁾。

76- 水差しはぶどう酒で満たされ、上部は泡立っている。また、羊肉の切り身が焼き串に刺されている。

77- そこでは、召使が移動式の給仕卓¹²³⁾より高い位置に腹帯を締めてきびきびと働いている。木製の皿の中には、酢をはじめ各種の香辛料が乗せられている。

78- かくして、私は赤みを帯びた、身震いをもたらす朝酒を飲んだ。それは、栓を抜きたての最高の酒である。まことに、享樂は気晴らしになるものだ。

79- (ぶどう酒は) 生でも、水を混ぜてでも飲まれる。時には(歌姫が)天井にほどこされた黄金色の彫刻のような、人々に記憶され、伝えられている見事な歌で我らを癒す。

80- 首の長い歌姫は優しく、歌の終わりに、震わせる彼女の歌声には、酒を飲む者らを魅惑する響きがある。

81- 彼女は朝、我々を楽しませてくれる。それに応えて、我々は、彼女の上に高価な外布やその他の衣装を投げて贈り物とする。

121) kūb : 取っ手なしだが水差しのような形のもの、との説明があり、コップではない。栓を土でしているので土器かもしれないが、アンタラの *muʿallaqa* 39行に「酒は線が刻まれた黄色のグラスで飲むが、それは左側に渡し網がついた、白い銀の水差しの側におかれている。」とあるように、銀製と思われる。(『アラブ・イスラム研究』5, p.28参照)

122) 野生のロバは腹を膨らませるまで水を飲むので、その姿は井ぶりに喩えられる。ブドウ酒はここのように冷水割りでも、お湯割りでも、ときには、何も混ぜずに飲まれていた。アムル・ブヌ・クルスウムの *muʿallaqa* 2行では、「酒にお湯が混ぜられると、あたかもサフランが入っているように真紅に輝いている。」とある。(『アラブ・イスラム研究』7, p. 9参照)

123) *khuwān* (又は *khiwān*) : 食べ物を給仕する脚つきテーブルのことで、ペルシャ語。

以下に収録した 32-33 頁は、本来印刷されるべきであった頁である。

関西アラブ研究会

The following pp. 32 - 33 were to be printed when published.

Kansai Arabu Kenkyūkai

- 11- 雌ダチョウは、太陽が右手を、何物をも覆い隠す暗夜へと広げ始めると⁸⁰⁾、整然と積み上げられた卵のある巣を思い出した。
- 12- 雌ダチョウの餌場は巣から遥かに隔てられている。その雛はアー⁸¹⁾の実る樹や水分の多く分厚い葉をつけたコロシントが生えている所で、さえずっている⁸²⁾。
- 13- それゆえ、雄、雌つがいのダチョウは、日没前になると、雨雲が降らすタ立のような猛烈な速さで帰路を急いだ。
- 14- ちょうど、頭の黒い被り物を脱いで（美しい素顔を見せる）フムス⁸³⁾の女のように、夕方（雌ダチョウは）両翼をテントのように広げ、卵を抱き温める。
- 15- ウマイラよ⁸⁴⁾、多くの若者が、立派な人格と気前よさを備え、偉業を成し遂げたか、そなたは何によって知るか（知るべきだ）。
- 16- 彼らは（社交的な）冗談が上手で、客の接待にも抜かりがなく、（平時には）物惜しみせず、戦時には、戦いをあおる火かき棒となる。
- 17- 私は、早朝、日が昇る前に、鳥が鳴き始めるより早く、酒が沢山入った皮袋を買って、彼らの訪問に備えた。
- 18- かくして、私は彼らの一日を短いものにした。すなわち、彼らに、屠殺されるとき背の高い雌ラクダのウードのような鳴き声を聞かせ、雨天の日の歌姫の歌声を聞かせ、豪華な食事でもてなした⁸⁵⁾。
- 19- このようにして、彼らの一日は終わり、各自の住まいへと帰っていった。彼らは酩酊していて、乱痴気騒ぎを非難して叱る者の言葉にも耳を傾けなかった。
- 20- 私は、なんと多くの、パッタの大群のように押し寄せる侵略者らを、眼光鋭い、鍛え上げた駿馬をかって、夜明け前に、押し返したことであろうか。
- 21- この馬は投石のように素早く動くが、ゆったりとした纏をまとっていて敵の矢をはね返し、しなやかで良くたわむ丈夫な槍を備えている。

状の花序にいて受粉させる。lifを除去する行為を 'abr と言う。雄花が 'ibra（針）に喩えられるのはこのためと思われる。なお、10行目のような場合に雄ダチョウは最速で走る。

- 80) 太陽が右手を広げ始める（「沈み始める」の意）という表現は、Labīd が盗用したとアルアスマイーは解説している。Labīd の *Mu'allāqa* 65行では、上の句が 'alq-at yad-an fī kāfir-in となっている。単語の入れ替えはあるが、それは本詩11行の下句と意味が同じである。『アラブ・イスラム研究』6号、21頁参照。
- 81) アー 'ā は sarḥ という樹の実でダチョウが好んで食べる。
- 82) この一行は、10、11行の不安による緊張感のある語り口とそぐわない印象を受ける。
- 83) 多分、この詩人は玉子を温めるのは、雄ダチョウの習性であることに気付かなかったのであろう。Hums (°Ahmas の複数形) はクライシュ、フザーア、バヌー・アーミル、キナーナ各部族の女性を指す。これらの部族は聖地の近くに住み、巡礼期にはいくつかの特権が認められていた。それ以外の女性は Hilla と言われていた。女性が意図的に被り物を脱ぐのは美しさを見せるのが目的で、醜女はこのようなことはしない。
- 84) 原文通りスマイヤ Sumayya とすると、本詩集 No.VIII (al-Hādīra の作) 16行の上の句と同じ名前になる。al-Hādīra は6世紀後半 Huraqa の戦いに参加した古い時代の詩人である。別にウマイラ Umayra という伝承もあるので、おそらく、これが正しいと思われる。これは1行目の女性アムラ 'Amra の縮小形であろう。
- 85) 雌ラクダは屠殺され、ふるまわれたのである。「雨天の日の歌姫」についてはタラファの *Mu'allāqa* 59行に「(人生の第三の楽しみは) 雨天の日を短しとばかりに、いな、雨天の日とは素晴らしいもの、一柱で持ち上げたテントの下で、ふくよかな美しい乙女と戯れること。」という有名な一行がある（『アラブ・イスラム研究』4号、14頁参照）。

- 22- 額が白く輝いた、(人生の、又は、恋の) 経験の少ない、野牛のようなパッチリとした黒い瞳の多くの乙女らが、彼女らを見つめる男たちに驚異の念を起させた。
- 23- 私は、このような乙女を戯れに誘い、彼女の不安を除きながら、夜を過ごしたが、やがて、夜明けを迎え、あたりが明るくなった。
- 24- 敵意を募らせる幾多の集団が害意をいだき、彼らの胸から罵り言葉を投げかける。
- 25- 私は、多くの激しい敵意を持つ者たちに、彼らに仇なす条件で和解させ、彼らの空虚な要求を明白な事実でもって論破した。
- 26- 威勢と知力を備えた決然とした男の言葉で私は敵を恐れさせ、従者に加えた。すなわち、ライオンに咆哮された者を、咆哮しているライオンに服従させたのである。